

## PRIJEVODI STUDENATA JAPANOLOGIJE

日本の小説や昔話をクロアチア語に翻訳をした、学生たちの作品を紹介します。学生たちは青空文庫、福娘.com、今昔物語集現代語訳版などのインターネットで公開されている資料や、『レベル別日本語多読ライブラリー』（アスク出版）などの本を参考に翻訳を行いました。

U ovom dijelu donosimo prijevode studenata japanologije koji su s japanskog na hrvatski preveli odabrane priče i bajke. Studenti su se služili tekstovima dostupnima na Internetu poput Aozora Bunko, Fukumusume.com, Konjaku monogatarija (preveden na suvremeni japanski), te u knjigama poput „Japanese Graded Tadoku Library” (ASK)

<https://www.doi.org/10.17234/9789533791319.14>



## こぶとりじいさん Starac s kvrgom

### (Kobutori jiisan)

むかしむかし、あるところにきこりのおじいさんがいました。

おじいさんは、たいそうなはたらきもの。でも、たった一つこまったことがありました。

それは、ほったについている、大きな大きなこぶでした。

「じゃまな こぶだよ、  
とりたい こぶだよ  
だけど とれない、  
こまった こぶだよ」

ある日のことです。おじいさんがいつものように、山で木をきっていると、急に空がくもって、ざあーっと大つぶの雨がふってきました。

ぴっか、ごろ ごろ ごろ。かみなりも なりだしました。

雨はざんざか、かぜはびゅうびゅう。とても家へは帰れません。おじいさんはあわてて、ちかくの小さなおどうに飛び込みました。

「やれやれ、ここで雨宿りだ。」

そう言って、ごろんと横になりました。

横になると、昼間のつかれが出たのでしょうか。いつのまにか、ぐっす

Jednom davno, živio je stari drvosječa.

Stari je drvosječa bio vrijedan radnik, no postojala je jedna stvar koja ga je mučila.

Na obrazu je imao veliku, veliku kvrgu.

„Neugodna kvrga,  
kvrga koju želim skinuti.  
Ali, ne mogu ju skinuti...  
Problematična kvrga, zaista”

Jedan dan, kad je starac na planini rezao drva kao i inače, nebo se iznenada zamračilo i počele su padati velike kapljice kiše.

Počelo je i grmjeti.

Uz snažnu kišu, čulo se i zavijanje vjetra.

Nije se mogao vratiti kući.

Počeo je paničariti i pojurio u obližnji mali hram.

„Uh, ovdje se mogu skloniti s kiše”, reče starac te se ispruži.

り眠ってしまいました。

どのくらいたったか、ひよいと目をさましたおじいさんは、

「はてな」

と耳に手をあてました。あらしはやんで、おどろの外はもう真っ暗です。夜中です。夜中だというのに、遠くからわいわい、がやがや、にぎやかな声が聞こえてきます。

声はだんだん近づいて、とうとうおどろの前までやってきました。おじいさんは、おそろおそろ外をのぞいて見ました。

「あっ」

赤い鬼、青い鬼、いろんな鬼。こわい顔の鬼たちが、おどろの前でたき火を始めています。

びっくりしたおじいさんは、ぶるぶる、ぶるぶる、震えだしました。ふるえながら、それでも戸のすきまから、そうっとのぞいていました。

すると、おにたちは、たき火をかこんで、さかもりを始めました。

「さあみんな、こんやもゆかいにうたおうぜ。おどろうぜ」

頭らしいおにが言うと、おにたちは酒を飲み、歌を歌い、やがて立ち上がっておどり出しました。

ピーヒャララ ドンドコド

おれたちゃ なかまだ、

でれすこ ひよい ひよい。

ようた ようだぞ、

でれすこ ひよい ひよい。

なんと、おにたちのたのしそうなこと。おどろかっこうのおもしろいこと。

Čim se ispružio, obuzeo ga je poslijepodnevi umor.

Prije nego što je shvatio što se događa, već je duboko spavao.

Ne znajući koliko je spavao, starac se iznenada počeo buditi i rekavši „Što je to?” stavio ruke na uši.

Oluja je prošla, a vani je već bio mrkli mrak.

Bila je ponoć.

Unatoč tome, u blizini su se mogli čuti živahni glasovi.

Glasovi su se postupno približavali, sve dok se na kraju nisu zaustavili ispred samog hrama.

Starac je, strašno se bojeći, virnuo van.

„A!”

Crveni demon, plavi demon, svakakvi demoni.

Demoni strašnih lica su ispred hrama zapalili vatru.

Iznenadeni starac se počeo tresti od straha.

Iako se bojao, svejedno je pogledavao van.

Demoni su okružili vatru i počeli se zabavljati.

„Prijatelji, ove ugodne večeri pjevajmo! Plešimo!”

Kada je demon koji je izgledao kao vođa to izrekao, ostali su demoni počeli piti alkohol, pjevati pjesme, a na koncu su ustali i zaplesali.

„Prijatelji smo, la la la...”

Pijani smo, la la la...”

ふしぎなことに、おじいさんは、  
ふるえていたのが、いつのまにかと  
まってしまいました。

そればかりか、むねがわくわく、  
足がむずむず、からだがりひとりでに  
うごいて、どうにもこうにもじっと  
してられません。

おじいさんは、こわいのもわすれ  
て戸を開けると、外へ飛びだしまし  
た。

「おれも おどろぞ  
でれすこ ひよいひよい」

おじいさんは、おにたちの中に  
とびこんで、ちょうしよくおどりは  
じめました。

手をふり、こしをふり、むちゅう  
でおどるおじいさん。そのおどりの  
うまいこと、うまいこと。

びっくりしたのは、おにのほうで  
す。

おにたちは大よこびで  
「やれ、のめ、それくえ」

さけやごちそうをすすめました。  
おじいさんは、さけをのむと、ま  
すますいきもち。こぶまで、ぶる  
ん、ぶるんゆらしながらじょうずに  
おどりました。

おれたちゃ なかまだ  
でれすこ ひよい ひよい。  
とりがなくまで、  
でれすこ ひよい ひよい。

そうするうちに、とおくのほうで  
けけ、けっこー  
と一ばんどりがなきました。

Kako li su se samo činili sretnima.

Kako li je njihov način plesanja bio za-  
nimljiv.

Začudo, starac koji se do maločas bojao,  
iznenada se prestao tresti.

I ne samo to, već mu je i srce počelo lupati,  
noge poskakivati i tijelo mu se počelo mi-  
cati te se nije mogao zaustaviti.

Zaboravivši strah, starac je otvorio vrata  
te poletio van.

„I ja ću isto plesati! La la la...”, starac se  
priključio plesu demona.

U transu je mahao rukama i pomicao  
bokove.

Starčev je ples bio iznenađujuće dobar.

Demoni su se čudili.

Bili su oduševljeni,

„Hajde, pij, jedi!”, nudili su mu piće i jelo.

Što je više pio, starac je bivao veselijim.

Vješto je plesao dok mu se kvrga njihala.

„Mi smo drugovi, la la la la...  
Dok jutro ne svane, la la la la...”

もうすぐよがあけます。おにたちは、ぴたっとおどるのをやめ、かしらがおじいさんにいました。

「じさま。おまえのようなおどりのうまいやつは、はじめてみたわい。あしたのばんも、きてくれよ」

「へ、へい」

おじいさんは、ぴよこんとあたまをさげました。

でも…。

「このじさま、ひょっとしたらうそをついて、こないかもしれぬ」

かしらは、そういつて、

「こないとこまるから、こぶをあずかっておこう」

いきなり、おじいさんのこぶを、えいっとばかりに、にぎりとりました。

「あれっっ」

おじいさんはさけんだまま、気をうしなって、あとはなんにもわからなくなっていました。

気がついたら、もう夜は明けて、おにたちはどこにもいません。

おじいさんは、そうっとほっぺたをなでてみました。手がつるりとすべりました。こぶはあとかたもありません。血も出ていません。いたくありません。

「えへっ…、うふっ…、うへへへ、おほほ…」

おじいさんは、ほっぺたをなでなで、大よろこびでうちへかえりました。

Dok su se veselili, u daljini se začuo prvi pijetao.

Ubrzo je svanula zora.

Demoni su prestali plesati, a vođa demonna je rekao:

„Starče, nikad nisam vidio nekoga tako dobro pleše.  
Dodi i sutra.”

„D, da…” odvrati starac i nakloni se.

Ali…

„Možda starac laže i sutra neće doći”, rekao je vođa demonna.

„Neće biti dobro ako ne dođeš.  
Za svaki slučaj ću zadržati tvoju kvrgu.”

Odjednom, vođa je povukao starčevu kvrgu.

„Auuuu!”

Starac je tako povikavši izgubio svijest te se nije ničeg sjećao nakon toga.

Kad se osvijestio, već je bilo jutro, a demonna nije bilo nigdje.

Starac je polako pomilovao svoj obraz.

Pod rukom mu je bilo glatko.

Nije bilo ni traga kvrgi.

Nije bilo ni krvi, niti je boljelo.

„He, he, ha, ha…”

さあて、おじいさんのとなりに、もうひとり、いじわるおじいさんがいました。このおじいさんも、ほんたいのほっぺたに、大きなこぶがありました。

となりのおじいさんは、おにの話を聞くと、うらやましくてたまりません。

「私も、こぶをとってもらおう」  
 そういって、いそいで山へでかけて行きました。

となりのおじいさんは、雨もふらないのに、おどろの中にかくれました。

今か今かと待つうちに、夜になりました。

鬼たちが集まって、いよいよさかもりがはじまりました。

「夕べのじいさまは、まだこぬか。  
 でれすこ ひよいひよい」

「さあ、今じゃ」

となりのおじいさんは、こわくてぶるぶるふるえながら、それでも、外へ出て行きました。

となりのおじいさんは、おっかなびっくり、おどろもへたくそ、へっぴりごし。歌もわすれて

「ばかすけ どっつけ、  
 でれすこ どっつけ」

鬼たちは、たいくつでたまりません。

「じさま、そんなおどろは見とうもないわい」

かしらはおこって

「ゆうべのこぶは、返してやる。とつとと帰れ」

いうなり、となりのおじいさん

Starac je nastavio milovati obraz te se s veseljem vratio kući.

U starčevom je susjedstvu živio jedan zločesti starac.

Zločesti starac je također na drugom obrazu imao veliku kvrgu.

Čuvši priču o demonima, postao je ljubomoran.

„Želim da i meni skinu kvrgu”, rekao je te brzo krenuo put planine.

Zločesti starac se, iako nije kišilo, također sakrio u malom hramu.

Nakon dugog čekanja, pala je noć.

Demoni su se okupili i zabava je mogla početi.

„Starac od sinoć ipak nije došao, la la la...”

„Huh, sad!”

Iako je drhtao od straha, starac je izašao van.

Drhtavši loše je plesao a zaboravio je i pjesmu.

„Na, na, na, na...”, pjevao je loše starac.

Demoni su se dosađivali.

„Starče, takav ples ne želimo gledati.”

のほっぺたに、こぶをなげつけました。

「ひゃあーっ」  
すべすべしたほうのほっぺたにも、  
大きなこぶがくっつきました。  
こぶは二つになりました。

「うしゅ うしゅ うしゅ…」

となりのおじいさんは、なきだしました。ないてもこぶはとれません。

朝になってもとなりのおじいさんは、山の中にすわったまま、ないておりました。

Voda demona se ustao i rekao:

„Jučerašnja kvrga, vraćam ti je. Uzmi je i idi!”, te mu bacio kvrgu na lice.

„Aaa…”

Na suprotnoj je strani lica dobio veliku kvrgu. Sad je imao dvije.

„A jooj, a jooj…”

Zločesti starac je počeo plakati.

No, unatoč svom plakanju, kvрге nije mogao skinuti.

Iako je došlo jutro, i dalje je sjedio u planini i plakao.

Nina Malčić-Pirin, Igor Ćorić



## かぐや姫 Princeza Kaguya

### (Kaguyahime)

むかしむかし、「竹とりのおきな」と呼ばれる、竹とりのおじいさんがいました。

おじいさんの仕事は、山で取って来た竹でカゴやザルを作る事です。

ある日の事、おじいさんが山へ行くと、一本の竹の根本がぼんやりと光り輝いてました。

「おや？何と不思議な竹だろう」

おじいさんは、その光る竹を切ってみました。

すると竹の中には、大きさが三寸(約九センチ)ほどの、ぽーっと光り輝く可愛くて小さな女の子が入っていたのです。

「光る女の子とは…。きっとこの子は、天からの授かり物に違いない」

子どものいないおじいさんは、大喜びでその女の子を家に連れて帰りました。

そして、おじいさんが連れて帰った女の子を見て、おばあさんも大喜びです。

Nekoć davno bijaše jedan starac po imenu Taketori no Okina, koji je za život sjekao bambus i od njega izrađivao košare i sita.

Jednoga je dana, u bambusovoj šumi, ugledao neobičan bambus koji je odavao sjajnu svjetlost.

„Čudnog li bambusa..”

Kada je presjekao bambus, unutar njega je spazio malenu, svega devet centimetara visoku, prelijepu djevojčicu obasjanu svjetlošću.

„Djevojčica obasjana svjetlošću....Sigurno je dar se neba”

Starac, koji nije imao vlastite djece, bio je presretan i odlučio je djevojčicu odvesti kući.

Ugledavši djevojčicu i njegova se supruga jako razveselila.

「まあ、まあ。なんて可愛い女の子でしょう。おじいさんの言う通り、この子は天からの授かり物に違いありませんわ」

おじいさんとおばあさんは、その女の子を自分の子どもとして大切に育てる事にしました。

あの小さかった女の子は、わずか三ヶ月ほどの間にすくすくと育って、それはそれは美しい娘になったのです。その美しく不思議なかぐや姫を、世の男たちがほうってはおきません。

多くの若者たちがおじいさんの家にやって来ては、かぐや姫をお嫁さんにしたいと言いました。

そしてその多くの若者たちの中でも特に熱心だったのが、次の五人の王子たちです。

彼らは名前を、

石作皇子(いしつくりのみこ)

車持皇子(くらもちのみこ)

阿部御主人(あべのみうし)

大伴御行(おおとものみゆき)

石上麻呂(いそのかみのまろ)

みんな身分がとても高く、そしてお金持ちです。

「誰も、婿どのとしては申し分ないのだが」

選びかねたおじいさんは、かぐや姫に相談をしました。

「五人のお方は、みな、それぞれに立派なお方たちじゃ。お前は、どのお方がいいのかね？」

するとかぐや姫は、こう答えました。

„Ajme, lijepo li djevojčice! Kako si rekao, sigurno je dar s neba.”

Starac i starica odlučili su je odgajati s velikom brižnošću, kao da je njihovo vlastito dijete.

Tek što prodoše tri mjeseca, mala djevojčica već postade lijepa mlada djevojka. O nesvakidašnje lijepoj princezi Kaguyi se pročulo po cijeloj zemlji.

Mnogo je mladića dolazilo u starčevu kuću s namjerom da je ožene.

Ipak, petorica nisu nikako odustajala.

Njihova imena su:

Princ Ishitsukuri

Princ Kuramochi

Abe no Miushi

Otomo no Miyuki

Isonokami no Maro

Svi su bili ugledni i bogati.

„Kojeg da uzmem za zeta?”

Ne mogavši odlučiti, starac se obrati Kaguyi:

„Sva petorica su dobri ženici, ali kojeg bi ti izabrala?”

Princeza Kaguya je odgovorila:

„Postat ću ženom onome koji mi donese rijetko blago koje zatražim od njega. Evo o čemu se radi....”

「今からわたくしの言う、世にもめずらしい宝物を探して持って来たお方のところへ、お嫁に行きたいと思います。その宝物とは…」

話を聞いたおじいさんは、五人の王子たちにかぐや姫の言葉を伝えました。

「かぐやは、こう申しております。

石作皇子どのには、天竺にあるおしゃかさまが使ったうつわだといわれている、《仏の御石の鉢(ほとけのみいしのはち)》を。

車持皇子どのには、東の海の蓬莱山にある、根っこが銀でくきが金、実が真珠で出来ている《玉の枝(たまのえだ)》を。

阿部御主人どのには、もろこし(今の中国)にある、火ネズミと呼ばれる伝説のネズミの皮で作られた燃えない布である《火ネズミの裘(かわごろも)》を。

大伴御行どのには、《竜の持っている玉》を。

石上麻呂どのには、つばめが生むというタカラ貝と呼ばれるきれいな貝の《子安貝(こやすがい)》を。

それぞれ、お持ちいただきたいと」

それを聞いた五人の王子たちは、思わず目を見張りました。

「何という、難しい注文だ」

「どれも、簡単に手に入る品物ではないぞ」

しかしそれらの宝物を持って行かないと、かぐや姫をお嫁にする

Poslušavši princezu, starac se obrati petorici:

„Princ Ishitsukuri treba u dalekoj Indiji pronaći Budinu kamenu posudu.”

„Princ Kuramochi treba s planine Hōrai donijeti zlatno stablo na kojem rastu dragulji.”

„Abe no Miushi treba donijeti krzno vatrene štakora koje se ne može zapaliti.”

„Otomo no Miyuki treba donijeti dragulj iz zmajevog vrata.”

„Isonokami no Marotani treba uzeti školjku za siguran porođaj iz lastavičjeg gnijezda.”

Čuvši princezine riječi petorica pomisliše:

„Kakvi su ovo nemogući zadatci?!”

No kako bez ispunjena zadatka neće moći oženiti princezu, krenuše u potragu.

事が出来ません。

そこで五人の王子たちは、それらの宝物を探すために帰って行きました。

まずは石作皇が、天竺に行つて仏の御石の鉢を手に入れる事は無理だと思い、大和の国(やまとのくに→奈良県)の山寺で手に入れた古い鉢をきれいにかざって、かぐや姫のところへ持って行きました。

「天竺へ行って、《仏の御石の鉢》を手に入れました」

石作皇子が偽物の鉢を差し出すと、かぐや姫は布でその鉢をみがいて、

「《仏の御石の鉢》は、みがけばみがくほど光り輝く鉢です。これは、《仏の御石の鉢》ではありません」

と、偽物である事を見破りました。

車持皇子も蓬莱山には行かず、たくさんの腕の良い職人を集めて見事な玉の枝を作らせました。そしていかにも、蓬莱山から帰って来たと見せかけて、

「苦労しましたが、蓬莱山から《玉の枝》を持ち帰りました」

と、言ったのです。

偽物ですが見事な出来ばえに、かぐや姫も言葉をなくして見つめていると、そこへたくさんの男たちが現れました。

彼らは、この玉の枝を作った職人たちです。

「車持の皇子どの。《玉の枝》をお作りしたお金を、早く払ってく

Princ Ishitsukuri trebao je u dalekoj Indiji pronaći Budinu kamenu posudu. Pomislivši kako je to nemoguće, kraljević je otišao u stari budistički hram u Nari i potražio prikladnu posudu.

„Bio sam u Indiji i donio kamenu Budinu posuda koju si zatražila”, slagao je princ pokazavši kopiju.

- Ne, to nije ono što sam tražila. Prava bi se Budina posuda sjajila - odgovorila je kraljevna Kaguya odmahujući glavom.

Princ Kuramochi trebao je s planine Hōrai donijeti zlatnu granu na kojoj rastu dragulji. Nakon nekoliko dana, princ je Kaguyi zaista i donio zlatnu granu s kojeg se sjajilo drago kamenje rekavši:

„Bilo je teško no donio sam što si tražila.”

No tada su se kod kraljevine pojavili i obrtnici koji su se jako naljutili jer im kraljević Kuramochi još nije platio. Naime, kraljević je obrtnicima dao da izrade kopiju grane.

ださい」

「こ、これ！こんなところで何を言う」

玉の枝が偽物だとばれた車持皇子は、はずかしそうにかぐや姫の家から逃げて行きました。

阿部御主人も、もろこしには行かずに、もろこしからやって来た商人から高いお金で《火ネズミの裘》を買いました。

「もろこし中を探し回って、やっと手に入れる事が出来ました」

するとかぐや姫は、一目見て言いました。

「見事な裘ですが、本物なら火に入れても燃えないはずですよ」

「はい。さっそく、火に入れてみましょう」

阿部御主人は自信たっぷりに火の中へ《火ネズミの裘》を入れましたが、偽物の裘は簡単に燃えてしまいました。

「もろこしの商人、よくもわしをだましたな！」

阿部御主人は、怒りながら帰って行きました。

四番目の大伴御行は、《竜の持っている玉》を手に入れようと竜を探して航海に出ました。

ところが、ものすごいあらしに出会って、乗っている船が沈みそうになったのです。王子は、嵐に向かって祈りました。

「竜神さま。どうか、お助けください。わたしがあなたの玉を欲しがるから、あなたが怒って暴れておられるのなら、もう二度と玉が

„Mmmolim, što to govorite..?“ posramljeno je prozborio princ Kuramochi i pobjegao iz Kaguyine kuće.

Abe no Miushi također nije otputovao u Kinu već je od trgovaca koji su se iz Kine vratili, po skupoj cijeni, kupio krzno vatrene štakora.

„Dugo sam putovao po Kini i konačno uspio doći do krzna.“

Princeza pogleda krzno i odgovori: „Prelijepo krzno no ako je pravo neće izgorjeti ako ga bacimo u vatru.“

„Naravno, bacimo ga.“ - pun samopouzdanja uzvрати princ i baci krzno u vatru. Krivotvorina je odmah izgorjela.

„Lijepo su me izigrali trgovci iz Kine!“ reče Abe no Miushi i ljutito ode.

Otomo no Miyuki trebao je pronaći dragulj iz zmajevog vrata. U potragu je krenuo brodom ali zahvatila ga je oluja. Pomislivši kako je oluju podigao duh ljutitoga zmaja, zavapio je:

„Upomoć! Ako si ljut jer ti želim uzeti dragulj molim te da mi oprostiš i zausta-

欲しいなどと申しません。どうかこの嵐を、おしずめください」

するとすぐに嵐がやんで、王子は何とか都へ帰る事が出来ました。でも《竜の持っている玉》を手に入れる事が出来なかったのので、それっきりかぐや姫のところへは現れませんでした。

最後の石上麻呂は、屋敷ののき先のつばめの巢の中に光り輝く固まりがあるのを見つけると、さっそくやぐらを組ませて、やぐらの上からつるしたカゴに乗ってつばめの巢に手を入れました。

「あったぞ。つばめの《子安貝》があったぞ。これでかぐや姫は、わしの妻だ」

しかし、あまりのうれしさにカゴをゆらしてしまったので、カゴをつるしたひもがぷつんと切れてしまいました。高いところから地面に落ちた王子は、腰の骨を折る大けがです。しかも《子安貝》と思っていたのは、ただのつばめのふんだったのです。石上麻呂はがっかりして、そのまま病気になってしまいました。

こうして五人の王子たちは、誰一人、かぐや姫をお嫁にする事は出来ませんでした。

さて、この話しがついに、帝(みかど→天皇)の耳にも届きました。

そしてかぐや姫の美しさに心を奪われた帝が、かぐや姫を宮廷に迎えると言ったのです。

帝と言えば、この日本で一番偉いお方です。

viš oluju! Više neću ni pomisliti da ga uzmem!”

U tom se času oluja smirila a princ se vratio u prijestolnicu. No kako nije uspio uzeti dragulj nije se više pojavio pred princezom.

Ostao je Isonokami no Maro koji je trebao iz gnijezda lastavice uzeti školjku koja olakšava porođaj.

Ljestvama se popeo na visoki krov...„Evo školjke, evo je! Princeza će biti moja žena!”... od silne sreće se poskliznuo, pao s velike visine i slomio kuk. Ono što je mislio da je školjka bio je lastavičji izmet. Razočaran, princ se teško razbolio.

Tako niti jedan od petorice udvarača nije uspio ispuniti svoj zadatak i oženiti princezu Kaguyu.

Glasine o kraljevni Kaguyi stigle su i do cara koji je k njoj poslao sluge želeći je dovesti k sebi.

Najmoćniji čovjek Japana želio ju je vidjeti.

おじいさんとおばあさんは大喜びですが、かぐや姫は宮廷に行くのを断りました。

帝の力を持ってすれば無理矢理にでもかぐや姫を宮廷に迎える事は可能でしたが、帝はとても心優しいお方だったので、無理にかぐや姫を迎えようとはせずに、かぐや姫とは和歌を取り交わす関係となりました。

かぐや姫が帝と和歌を交わす関係になってから三年の月日がたった頃、かぐや姫は月を見ては涙を流すようになりました。心配したおじいさんとおばあさんが、かぐや姫にたずねました。

「何がそんなに、悲しいのだね」

「心配事でもあるなら、わたしたちに話してごらん」

しかしかぐや姫は何も言わず、光の玉のような涙をはらはらと流すばかりでした。そんなある夜、かぐや姫はおじいさんとおばあさんに、泣いているわけを話しました。

「お父さま、お母さま。実はわたくしは、人間の世界の者ではありません。わたくしは、あそこで光り輝く月の都の者です。

今度の十五夜に月の都から迎えが来るので、わたくしは月の都に帰らなければなりません。

それが悲しくて、泣いているのです」

「なんと！…しかし大丈夫。かぐや姫はわたしの大切な娘じゃ。必ず守ってやるから」

Starac i starica su se jako razveselili no Kaguya je odbila otići.

Car je nije želio odvesti protiv njezine volje pa joj je poslao pjesmu.

Nakon što su car i Kaguya razmijenjivali pjesme tri godine, Kaguya je počela plakala kad bi gledala Mjesec. Zabrinuti starac i starica upitaše je zašto plače.

„Zašto si tako tužna? Reci nam što te brine?“

Kaguya je bez riječi nastavila plakati lijevajući suze velike kao bisere, sve dok jedne večeri starcu i starici nije rekla:

„Ja nisam sa ovoga svijeta. Potječem iz svijeta na sjajnom Mjesecu. Sljedeće noći punog mjeseca dolaze po mene i moram se vratiti kući. Zbog toga sam tužna.“

„Kako je to moguće?...Ne brini, mi ćemo te zaštititi!“

そこでおじいさんとおばあさんは帝をお願いをして、月の都から来る迎えを追い返す事にしましたのです。

十五夜の夜、帝はかぐや姫を守るために、二千人の軍勢を送りました。二千人の軍勢は地上に千人、かぐや姫の屋敷の屋根に千人が並び、弓や槍をかまえて月の都から来る迎えを待ちました。やがて月が明るさを増し、空が真昼の様に明るくなりました。すると雲に乗った月の都の迎えたちが、ゆっくりとゆっくりとかぐや姫の屋敷へとやってきたのです。

「姫を守れ！あの者たちを追い返すのだ！」

二千人の軍勢たちは弓や槍で月の都の迎えを追い返そうとしましたが、どうした事か軍勢の体が石の様に動かなくなってしまったのです。

中には力をふり絞って弓矢を放った者もいましたが、弓矢は月の都の迎えに近づくと大きくそれてしまいます。

月の都の迎えは屋敷の上空でとまると、おじいさんにこう言いました。

「竹取りのおきなよ。姫を迎えに来ました。さあ、姫をお渡しなさい」

おじいさんとおばあさんは、かぐや姫の手を力一杯にぎりしめましたが、でもその手から力がすーっと抜けてしまいました。かぐや姫は静かに庭に出ると、いつの間にか美しい天女の羽衣を身にまと

Starac i starica su o svemu obavijestili cara.

Kada je stigla noć punog mjeseca, car je poslao dvije tisuće vojnika da zaštite Kaguyu.

Vojnici su se utaborili pred njezinom kućom.

U ponoć je odjednom sve obasjala blještava svjetlost. Okruženi oblacima, s neba su se spustila nebeska bića.

„Zaštitite princezu! Otjerajmo ih nazad!”

Vojnici su prema njima usmjerili lukove i strijele no odjednom se više nisu mogli pomaknuti.

Nebesko poslanstvo se zaustavilo na nebu iznad kolibe i obratilo starcu:

„Starče, došli smo po princezu, predaj nam je!”

Starac i starica čvrsto su držali Kaguyu za ruku no stisak je polako popustio.



っていました。

「お父さま、お母さま、これでお別れでございます。

これからは月を見るたびに、わたくしの事を思い出してください。そしてこれを、帝にお渡しください」

そう言っかぐや姫は、おじいさんとおばあさんに不老不死の薬と手紙を渡しました。

そしてかぐや姫は天女の羽衣で月の都のお迎えたちのところへ行くと、そのままお迎えたちと一緒にゆっくりと夜空へのぼって行き、月の光の中に消えてしまいました。

Princeza Kaguya im reče:

„Oče, majko, sada ćemo se oprostiti. Od sada kada pogledate na Mjesec, sjetite se mene. A ovo predajte caru.”

Princeza im preda pismo i eliksir besmrtnosti.

Nakon tog pozdrava, princeza Kaguya je polako, okružena nebeskim bićima, nestala u mjesečevoj svjetlosti.

Martina Lovrić, David Breznik,  
Nikolina Matušić, Jelena Grbavec,  
Natasa Borščak



## 注文の多い料理店 Restoran mnogih narudžbi

### (Chūmon no ōi ryōriten)

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことをいいながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここらの山はけしからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ」

「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞いもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたと倒れるだろうねえ」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。それに、あんまり山が物凄いで、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

Dvojica su mladih gospodina, odjevenih poput britanskih vojnika, s blistavim oružjem na ramenima, hodali visoko u planinama u pratnji dva psa nalik na bijele medvjede. Razgovarali su dok im je lišće šuštalalo pod nogama:

„Ova planina je uistinu užasna,” rekao je jedan. „Nismo naišli na ni jednu pticu ili zvijer. Stvarno bih želio brzo BENG-BENG, pucati u nešto!”

„Ne bi li bilo uzbudljivo ispucati dva, tri metka u jelenov zlatasti bok?” rekao je drugi. „Mogu zamisliti kako bi se zavrteo i tresnuo na tlo.”

Bili su toliko duboko u planinama da se čak i profesionalni lovac koji ih je vodio izgubio negdje odlutavši. Planina je djelovala zastrašujuće pa se u jednom treuntku onim dvama velikim psima nalik na bijele medvjede zavrtilo, pjena im se pojavila na ustima, počeli su zavijati i odjednom su uginuli. „Zapravo, za mene je ovo trošak od 2400 yena,” rekao je jedan dok je

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」

と一人の紳士が、その犬のまぶたを、ちょっとかえしてみ言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ」と、もひとりが、くやしそうにあたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻ろうとおもう」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなかったし腹は空いてきたし戻ろうとおもう」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい」

「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹ふいてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ」

「たべたいもんだなあ」

podizao pseće kapke. „Za mene je pak ovo trošak od 2800 yena,” rekao je drugi s žaljenjem, glave nagnute u stranu.

Prvi je gospodin problijedio. Zureći u drugog rekao je: „Mislim da ću krenuti natrag.”

„Sad kad tako kažeš, i meni je malo hladno i gladan sam. Mislim da ću i ja poći s tobom,” uzvratilo mu je drugi.

„Onda, završimo za danas. Na povratku možemo u jučerašnjem svratištu kupiti planinske ptice za 10 yena i vratiti se kući s njima.”

„Oni su imali i zečeve zar ne? Ako tako napravimo, dođe nas na isto. Onda, hoćemo li se vratiti kući?”

Međutim, problem je bio u tome što nisu imali pojma gdje bi trebali ići i kako se vratiti.

Odjednom je zapuhao snažan vjetar, trava se uskomešala, lišće je šuštalalo a drveće zaškripalo.

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろいろじゃないか。ぼくはもう何かたべたくて倒れそうなんだ」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なものです。

そして硝子の開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

„Jako sam gladan. Već dulje vrijeme mi kruli u želudcu,”

„Meni isto kruli želudac. Ne želim više hodati.”-

„Ni ja ne želim više hodati. Želim nešto pojesti. Da nam je bar nešto pojesti...” -

govorili su hodajući kroz šuštavu visoku travu.

Ogledavši se, ugledali su krasnu, u zapadnjačkom stilu sagrađenu kuću.

Iznad ulaza je stajao natpis: RESTORAN „KUĆA DIVLJE MAČKE”

„Ovo je savršeno!” rekao je jedan. „Tko je to mogao očekivati. Hoćemo li ući?”

„Oh, neobično je naići na restoran na ovakvom mjestu,” uzvratilo mu je drugi - „Ali u svakom slučaju, valjda ćemo moći nešto pojesti.”

„Naravno da hoćemo. Pa zar ne vidiš natpis?”

„Hajdemo unutra! Ako uskoro nešto ne pojedem, srušit ću se od gladi.”

Dvojica su kročila u prekrasno predvorje popločano bijelom elegantnom ciglom. Na staklenim vratima zlatnim je slovima pisalo:

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただでご馳走ちそうするんだぜ」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう」

SLOBODNO UĐITE. NEMOJTE SE USTRUČAVATI.

Dvojac se oduševio.

„Vidi ti to, na kraju uvijek sve dobro završi. Iako nas cijeli dan prate svakakve nevolje, konačno nešto dobro. Ova kuća je restoran, a poručuje nam da će nas častiti!”

„I meni se čini. To sigurno znači ovo: NEMOJTE SE USTRUČAVATI.”

Gurnuli su vrata i ušli u hodnik. Na drugoj strani vrata je pisalo zlatnim slovima:

DEBELJUŠKASTIM I MLADIM OSOBAMA ŽELIMO POSEBNO TOPLU DOBRODOŠLICU.

Dvojac se nanovno oduševio.

„Vidi, žele nam posebno toplu dobrodošlicu!”

„To je zato jer zadovoljavamo oba uvjeta!”

Požurili su hodnikom i stigli do svijetloplavo obojanih vrata.

„Koja čudna kuća. Zašto ima toliko puno vrata?”

„Ovo je ruski stil. Hladna mjesta ili mjesta u planinama su ti sva ovakva.”

「これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなこうさ」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい」

「これはぜんたいどういうんだ」

ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきっと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ」

「そうだろう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな」

「そしてテーブルにすわりたいもんだな」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからきものの泥どろを落してください」

Htjeli su otvoriti vrata, ali su spazili novi natpis sa zlatnim slovima.

MOLIMO DA BUDETE SVJESNI DA JE OVO RESTORAN MNOGIH NARUDŽBI.

„Čini se da im dobro ide! Čak i tu usred planina.”

„Tako je. Pa i u Tokiju je malo popularnih restorana na glavnoj ulici, zar ne?”

Dok su tako pričali, otvorili su vrata. S druge strane je pisalo:

IMAMO MNOGO NARUDŽBI, PA VAS MOLIMO DA BUDETE STRPLJIVI.

„Što znači sve ovo?” – namrštio se jedan.

„Hmm, to sigurno znači da se ispričavaju jer imaju puno narudžbi pa će priprema jela kasniti, tako nešto.”

„Tako je. Joj, želim što prije ući u neku sobu.”

„Da, i sjesti za neki stol.”

Na njihovu žalost, pojavila su se još jedna vrata. Pored njih je visjelo ogledalo, a ispod se nalazila četka s dugom drškom.

Na vratima je crvenim slovima pisalo:  
POŠTOVANI GOSTI, MOLIMO DA OVDJE POČEŠLJATE KOSU I SKINETE BLATO S ODJEĆE

と書いてありました。

「これはどうももつともだ。僕もさっき玄関で、山のなかだとおもって見くびったんだよ」

「作法の厳しい家だ。きっとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、たがいによりそって、扉をがたと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ」

„Vrlo razumno. A ja sam maloprije na ulazu pomislio kako je ovo neko mjesto za obične ljude s planine.”

„Strogi su oko bontona. Zasigurno ih često posjećuju važne osobe.”

Uredno su počesljali kosu i počistili blato s cipela.

No... čim su spustili četku na policu, zamaglila se i nestala, a kroz prostoriju je snažno prohujaao vjetar. Prestrašeno su se stisnuli jedan uz drugoga, zaletjeli se prema vratima i ušli u sljedeću prostoriju. Obojica su razmišljala kako bi im se, ako uskoro ne pojedu nešto toplo za snagu, još mnogo nepredvidljivih stvari moglo dogoditi.

S unutrašnje strana vrata ugledali su sljedeću poruku:

MOLIMO DA OVDJE ODLOŽITE ORUŽJE I METKE

Pogledali su oko sebe i ugledali crni stalak.

„Naravno, nije pristojno jesti i nositi oružje.”

„Uh, izgleda da su njihovi posjetitelji svi do jednog važne osobe.”



二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい」

「どうだ、とるか」

「仕方ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。

扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気のものなあぶない。ことに尖ったものはあぶないこういうんだろう」

「そうだろう。して見ると勘定うは帰りにここではらうのだろうか」

「どうもそうらしい」

「そうだ。きっと」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金

Skinuli su oružje i opasač, te ih odložili na stalak.

Pred njima su stajala još jedna crna vrata s natpisom:

MOLIMO SKINITE ŠEŠIRE, OGR-  
TAČE I CIPELE

„No, hoćemo li?”

„Nemamo izbora, zar ne? Ljudi koji dolaze ovamo sigurno su izuzetno važni.”

Objesili su šešire i ogrtače na čavao, skinuli cipele i tapkajući prošli kroz vrata.

S druge strane je pisalo:

MOLIMO DA IGLE ZA KRAVATU,  
MANŽETE, NAOČALE, NOVČA-  
NIKE I SVE METALNE PREDMETE,  
POGOTOVO OŠTRE, ODLOŽITE  
OVDJE

Pored vrata je otvoren stajao elegantan, crno lakirani sef. Imao je i ključ.

„Aha! Čini se da koriste struju pri kuhanju kakvih jela, metal je u takvoj situaciji opasan. Oštri predmeti također.”

„Valjda je tako. U tom slučaju pretpostavljam da se ovdje plaća račun pri izlasku.”

„Čini se da je tako.”

„Da, zasigurno.”

庫のなかに入れて、ぱちんと錠をかけました。

すこし行きますとまた扉とがあって、その前に硝子の壺が一つありました。扉にはこう書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください」

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ」

「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたが、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか」

と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。ここの主人はじつに用意周到だね」

Skinuli su naočale i manžete, stavili ih u sef te zaključali bravu.

Nekoliko koraka dalje stajala su još jedna vrata i pred njima staklenka. Na vratima je pisalo:

MOLIMO DA KREMU IZ STAKLENKE TEMELJITO RAZMAŽETE PO LICU, RUKAMA, I STOPALIMA

U staklenci je bilo vrhnje.

„Zašto žele da se namažemo vrhnjem?”

„To ti je prevencija za pucanje kože, to se događa kada je vani jako hladno a unutra jako toplo, kao sada....Čini se da ovamo dolaze stvarno važnih ljudi. Na ovakvom mjestu i mi možemo biti poput prave gospode.”

Dvojica su vrhnje iz staklenke namazali na lice, ruke i stopala s kojih su skinuli čarape. Još je malo kreme ostalo pa su, praveći se da mažu lice, potajice pojeli ostatak. U žurbi su otvorili vrata, a na drugoj strani je pisalo:

JESTE LI SE DOBRO NAMAZALI S KREMOM? JESTE LI NAMAZALI I UŠI?

Ugledali su još jednu manju staklenku.

„Nisam namazao uši. Mogle su mi ispuhati! Naš domaćin se stvarno dobro pripremio.”

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何かたべたいんだが、どうもこうどこまでも廊下じゃ仕方ないね」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐたべられます。早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。ところがその香水は、どうも酢のようなおいがするのです。

「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだろう」

「まちがえたんだ。下女が風邪かぜでも引いてまちがえて入れたんだ」

二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字でこう書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎょっとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ」

„Da, na sve je mislio. E, ja bih stvarno htio brzo nešto pojesti...ali ovi hodnici nemaju kraja!”

Nakon toga, pojavila su se vrata sa sljedećom porukom:

JELO SAMO ŠTO NIJE GOTOVO. PRIČEKAJTE JOŠ 15 MINUTA. MOĆI ĆETE JESTI USKORO. BRZO, NATRLJAJTE GLAVU PARFEMOM IZ BOCE.

Pred vratima je stajala zlatna bočica. Dvojica su dobro natrackali glave. No, parfem im je čudno zamirisao.

„Ovaj parfem čudno miriše, po octu. Pitam se zašto...”

„Sigurno se radi o grešci. Konobarica se prehladila i zabunom u bočicu ulila ocat.”

Otvorili su vrata i ušli unutra. Na stražnjoj strani vrata ugledali su natpis s velikim slovima:

OPROSTITUTE NA TOLIKIM NARUDŽBAMA. JOŠ JE OSTALA SAMO JEDNA. MOLIMO DA SE DOBRO NASOLITE SOLJU IZ STAKLENKE.

Ugledali su prelijepu plavu porculansku soljenku. No, ovaj put su prestrašeno pogledali jedno drugom u vrhnjem obilato namazana lica.

「ぼくもおかしいとおもう」

「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが…」

がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、…わあ」

がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「にげ…」

がたがたしながら、一人の紳士はうしろの戸を押おそうとしましたが、どうです戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。さあさあ、なかにおはいりください」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉めだまがこっちをのぞいています。

「うわあ」

がたがたがたがた。

「うわあ」

がたがたがたがた。

„Ovo je čudno.”

„I meni je ovo čudno.”

„Kad govore o mnogim narudžbama, to zapravo naručuju nas dvojicu?!”

„Čekaj malo...restoran u zapadnjačkom stilu, umjesto da gostima nudi jela u zapadnjačkom stilu...nudi svoje goste spremljene u zapadnjačkom stilu?! To bi značilo, ddddda nnnnas ddddvojica...” Od straha su im otkazali udovi i jedva su procijedili...

„Tttto sssmo nnnas ddddvojica... aaaaaaaa” Obuzela ih je jeziva strava.

-- Bjež' mo!”

Jedan je drhteći gurao vrata iza sebe, no ona se, iz nekog razloga, nisu pomicala ni milimetra. Na suprotnoj strani naišli su na vrata s dvije velike ključanice i izrezbarenim srebrnim nožem i vilicom, te natpisom:

HVALA VAM ŠTO STE DOŠLI. IZVRSNO STE SVE ODRADILI. MOLIMO VAS, IZVOLITE UĆI.

Da stvar bude gora, dva plava, sijevajuća oka promatrala su ih kroz ključanice.

ふたりは泣き出しました。すると戸の中では、こそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間拔けたことを書いたもんだ」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けてくれやしないんだ」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいって来なかったら、それはぼくらの責任だぜ」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしゃい。いらっしゃい。いらっしゃい。お皿さんも洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしゃい」

「へい、いらっしゃい、いらっしゃい。それともサラダはお嫌きらいですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしゃい」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふつつとわらって、ま

- Aaaaaa. – cvilio je jedan drhtavši.

- Aaaaaaa – cvilio je drugi.

Obojica se rasplakaše.

U tom se trenutku iza vrata začuše prigušeni glasovi:

„Ovo neće ići. – Shvatili su. - Oni nemaju namjeru utrljati sol na sebe.”

„Očito. Onako kako im je gazda napisao nije bilo dobro. Dao im je previše narudžbi i tako ih umorio. Onda se valjda sažalio... Uglavnom, pisao je gluposti. „

- „Što god. Kako god da okreneš, jedva ćemo dobiti kosti. „

- „U pravu si. No, ako ne uđu, to će biti naša krivica.”

- „Hoćemo li ih pozvati? - Pozovimo! - Ej! Gospodo! Molimo, brzo uđite! Uđite! Uđite! Tanjuri su već oprani, a povrće je dobro nasoljeno. Samo trebamo još vas lijepo ukrasiti s povrćem i poslužiti na snježno bijelim tanjurima. Brzo, uđite!

- „Hej! Uđite! Uđite! Ili ne volite povrće?”

- „Ako je tako, možemo upaliti vatru i ispržiti vas? Bilo kako bilo, brzo uđite!”

Dvojac se međusobno pogledavao, potrešeni i prestrašeni tiho su plakali.

た叫んでいます。

「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい」

「早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っています」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ」

という声がして、あの白熊のような犬が二疋、扉とをつきやぶって室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはううとうなってしばらく室の中をくるくる廻っていました、また一声

「わん」

と高く吠ほえて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

「にゃあお、くわあ、ごろごろ」

という声がして、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちら

S druge strane ponovno se začulo smijuljenje, a zatim i urlici:

- „Uđite! Uđite! Budete li toliko plakali, svo vrhnje ćete skinuti. Evo, samo malo! Sad ćemo ih donijeti! Brzo uđite!”

- „Gazda je već stavio ubrus, drži nož i obiljuje se. Samo još vi falite!”

Dvojac je plakao, plakao i plakao.

Odjednom se iza njih začulo : „Vau, vau! Grrr!” Ona dva psa, nalik bijelim medvjedima, probili su vrata i uskočili u sobu.

Oči koje su virile kroz ključanicu, istog trena su nestale. Psi su režali i trčali oko-lo pa se, ispustivši glasan „vau”, bacili na druga vrata. Vrata su se glasno urušila, a psi su, kao progutani, nestali.

S druge strane, iz duboke tmine, začulo se: „mjau” „grrr” „prrr”, a zatim šuškanje.

Soba je nestala poput dima, a dvojac se našao na hladnoći, drhteći u travi.

ばったりしています。

風がどうとふいてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなって戻ってきました。

そしてうしろからは、  
「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人はにわかに元気がついて  
「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い」

と叫びました。

簑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。

Njihovi kaputi, čizme, novčanici i igle za kravatu, sve je bilo tamo, visjelo s grana i razasuto po tlu. Nalet vjetra je uskomešao travu, lišće je zašušalo, a drveće zašrikpalo.

Psi su se pojavili zavijajući. Iza njih se začuo povik: „Gospodo! Gospodo!”

Dvojica su se pribrala i uzvratila: „Hej! Hej! Tu smo! Dođite ovamo, brzo!”

Lovac sa slamnatim šeširom se pojavio iz uskomešane trave. Konačno su se osjetili sigurno.

Pojeli su okruglice od riže koje im je lovac ponudio i vratili se u Tokyo, usput kupivši nešto pernate divljači za samo 10 yena.

No, i nakon povratka u Tokyo, koliko god se dugo opuštali u toplim kupkama, njihova lica smežurana poput starog papira, više se nikada nisu vratila na staro.

Sara Primc, Irena Štefančić,  
Matea Puškarić, Marija Lakić,  
Ana Jonjić, Marko Vrančić





## はなさかじいさん Starac zbog kojeg je cvalo cvijeće

(Hanasaka jiisan)

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

二人は子どもがいなかったの  
で、シロというイヌをとてまかわ  
いがっていました。

ある日、シロが畑でほえました。

「ここほれワンワン、ここほれワ  
ンワン」

「おや？ここをほれと言っている  
のか。よしよし、ほってやろう」

おじいさんがほってみると、

「ややっ、これはすごい！」

なんと、地面の中から大判小判  
がザクザクと出てきたのです。

この話を聞いた、となりの欲ば  
りじいさんが、

「わしも、大判小判を手に入れ  
る。おめえのシロを、わしに貸し  
てくれや」

欲ばりじいさんは、シロを無理  
矢理畑に連れて行きました。

そして、いやがるシロがキャン  
キャンないたところをほってみる  
と、くさいゴミがたくさん出てき

Jednom davno živjeli su djed i baka.

Par nije imao djece, zato je strašno volio  
svog psa po imenu Bijelko.

Jednoga dana Bijelko je lajao na polju.

„Ovdje! Vidi! Vau! Vau!

Ha? Govoriš mi da tu kopam? Dobro!  
Kopajmo!”

A kada je pokušao kopati, uzvikne: „Aaaa!  
Ovo je čudesno!”

Iz zemlje posvuda iskakalo je mnoštvo  
zlatnih novčića.

Čuvši tu priču, gramzivi susjed reče: „I ja  
bih se želio domoći zlatnih novčića. Posu-  
di mi svog Bijelka!”

Susjed je na silu odvuкао Bijelka na polje.

Kada je uplašeni i uplakani Bijelko po-  
kušao kopati, izašla je gomila smrdljivog  
smeća.

ました。

「この役立たずのイヌめ！」

怒ったよくばりじいさんは、なんと、シロを殴り殺してしまったのです。

シロを殺されたおじいさんとおばあさんは、なくなシロを畑にうめてやると、棒を立ててお墓を作りました。

次の日、おじいさんとおばあさんがシロのお墓参りに畑へ行ってみると、シロのお墓の棒が、ひと晩のうちに大木になっていたのです。

おじいさんとおばあさんは、その木で臼を作って、もちをつきました。

すると不思議な事に、もちの中から宝物がたくさん出てきました。

それを聞いた、欲ばりじいさんは、

「わしも、もちをついて宝を手に入れる。おめえの臼を、わしに貸してくれや」

と、臼を無理矢理かりると、自分の家でもちをついてみました。

しかし、出てくるのは石ころばかりで、宝物は出てきません。

「いまいましい臼め！」

怒った欲ばりじいさんは、臼をオノでたたきわると、焼いて灰にしまいました。

„Ti beskorisno pseto!”

Pobješnjeli susjed izudarao je Bijelka do smrti.

Starac i starica ubijenog Bijelka plačujući su stavili u zemlju, posadili bor i time mu napravili grob.

Sljedećeg dana, kada su djed i baka krenuli u polje posjetiti Bijelkov grob, bor što je bio na Bijelkovom grobu u jednoj je noći izrastao u veliko drvo.

Djed i baka od tog bora izradili su mužar i radili mochi kolačiće.

A tada... Iz mochi kolačića čudesno ispalo je mnoštvo blaga.

Čuvši za to gramzivi susjed reče:

„I bih se želio domoći bogatstva praveći mochi kolačiće. Posudi mi svoj mužar!”

Na silu je posudio mužar i kod svoje kuće krenuo raditi mochi kolačiće.

No, iz njega nije izlazilo blago, već samo kamenje.

„Prokleti mužar!”

Pobješnjeli susjed je udarivši sjekirom mužar, razlomio ga na pola, spalio i pretvorio u pepeo.

大切な臼を焼かれたおじいさんは、せめて灰だけでもと、臼を焼いた灰をザルに入れて持ち帰ろうとしました。

その時、灰が風に飛ばされて、枯れ木にフワリとかかりました。すると、どうでしょう。

灰のかかった枯れ木に、満開の花が咲いたのです。

おじいさんは、うれしくなっています。

「枯れ木に花を咲かせましょう。パアーツ」

と、いいながら、次々に灰をまいて、枯れ木に美しい花を咲かせました。

ちょうどそこへ、お城のお殿さまが通りかかりました。

「ほう、これは見事じゃ」

お殿さまはたいそう喜んで、おじいさんにたくさんのほうびをあげました。

それを見ていた欲ばりじいさんが、

「おい、わしも花を咲かせてほうびをもらう。その灰を、わしによこせ！」

無理矢理に灰を取り上げると、お殿さまに言いました。

「殿さま、この灰はわしの物です。わしが枯れ木に花を咲かせますから、わしにもほうびを下さい。パアーツ！」

欲ばりじいさんは、殿さまの前でたくさん花を咲かせようと、灰

Starac, čiji je neprocjenjivi mužar bio spaljen, sve što je želio bio je pepeo te ga je stavio u bambusovu košaru i ponio sa sobom kući.

U tom trenutku nošen vjetrom, pepeo se nježno spustio na uvenulo drveće.

Pogodite što se nakon toga dogodilo.

Na uvenulim granama, gdje se pepeo raspršio, pojavilo se cvijeće u punom cvatu. To je starca silno razveselilo.

„Rascvjetajmo cvijeće uvenulih grana! Puf!”

Izgovarajući to, posipavao je granu za granom te je uvenulim granama učinio da prelijepo cvijeće procvjeta.

Upravo tuda prolazio je velmoža jednog dvorca.

„Oh! Ovo je predivno!”

Velmoža je bio silno zahvalan te je starcu dao mnoge nagrade.

Vidjevši to, gramzivi susjed reče:

„Hej! I ja bih želio učiniti da cvijeće procvjeta te dobiti mnoštvo nagrada. Daj mi taj pepeo!”

Uzevši nasilno pepeo rekao je velmoži:

„Velmožo, svojim pepelom ozdravit ću Vaše uvenule grane, stoga Vas molim da me nagradite. Puf!”

をいっせいにまきました。

すると灰がお殿さまの目に入って、欲ばりじいさんはお殿さまの  
家来にさんざん殴られたということです。

Gramzivi susjed pred velmožom je odjed-  
nom istresao sav pepeo kako bi rascvjetao  
drveće.

Umjesto toga, prah je ušao velmoži u oči  
te su njegovi podanici nemilosrdno zaro-  
bili gramzivog susjeda.

Tako se to zbilo.

Marina Irina Barešić

## 浦島太郎 Urashima Tarō

### (Urashima Tarō)

むかしむかし、ある村に、心のやさしい浦島太郎という若者がいました。

浦島さんが海辺を通りかかると、子どもたちが大きなカメをつかまえていました。

そばによって見てみると、子どもたちがみんなでカメをいじめています。

「おやおや、かわいそうに、はなしておやりよ」

「いやだよ。おらたちが、やっとつかまえたんだもの」

見るとカメは涙をハラハラとこぼしながら、浦島さんを見つめています。

浦島さんはお金を取り出すと、子どもたちに差し出して言いました。

「それでは、このお金をあげるから、おじさんにカメを売っておくれ」

「うん、それならいいよ」

浦島さんは、子どもたちからカメを受け取ると、

Jednom davno u jednom selu živio je mlađić dobra srca po imenu Urashima Taro.

Kada je prolazio plažom, ugledao je skupinu djece koja je lovila kornjaču.

Približivši se, vidio je da ju djeca maltretiraju.

„Hej! Pustite ju jadnu!”

„Nema šanse. To je naša lovina. Što ćeš učiniti da nas uvjeriš?”

Kada ju je pogledao, zurila je u njega dok su joj se suze slijevale.

Urashima je izvadio novac i pružajući ga djeci rekao:

„Ako je tako, dat ću vam novac, a vi ćete mi prodati kornjaču.”

„Tako može.”

Uzevši kornjaču od djece Urashima joj reče:

「もう、つかまるんじゃないよ」と、カメをそっと、海の中へ逃がしてやりました。

さて、それから二、三日たったある日、浦島さんが海に出かけて魚をつっていると、

「浦島さん、…浦島さん」と、だれかが呼ぶ声がします。「おや？だれが呼んでいるのだろう？」

「わたしですよ」

すると海の上に、ひょっこりとカメが頭を出して言いました。

「このあいだは、ありがとうございました」

「ああ、あのときのカメさんかい」

「はい、おかげで命が助かりました。ところで浦島さんは、竜宮へ行ったことがありますか？」

「竜宮？さあ？竜宮って、どこにあるんだい？」

「海の底です」

「えっ？海の底へなんか、行けるのかい？」

「はい。わたしがお連れしましょう。さあ、背中へ乗ってください」

カメは浦島さんを背中に乗せて、海の中をずんずんともぐっていきました。

まっ青な光の中で、コンブがユラユラ。

赤やピンクのサンゴの林が、どこまでも続いています。

„Jesi li dobro? Više nisi zarobljena.”, te ju nježno pusti u more.

Od tog događaja nije prošlo ni dva – tri dana kada se Urashima zaputio pecati te je začuo kako ga neki glas doziva:

„Gospodine Urashima! Gospodine Urashima!”

„Ha? Tko me to zove?”

„Ja!”

U tom trenutku na površinu mora proviri kornjačina glava te ona reče:

„Hvala ti što si me spasio onaj dan!”

„Aaaa, ti si ona kornjača!”

„Zahvaljujući tebi moj život je bio spašen. Nego, jesi li ikad bio u Ryuuguovom kraljevstvu?”

„Ryuugu. Hmmmm A gdje je to?”

„Na dnu mora.”

„Ha? Na dnu mora.... Zar se može ići tamo?”

„Da! Ja ću te povesti. Zamolit ću te da mi se popneš na leđa.”

Kornjača je noseći Urashimu na leđima strjelovito ronila kroz more. U more je prodirala blijedoplava svjetlost, morska trava je lelujala, a rozi i crveni koralji posvuda su se prostirali.

「わあ、きれいだな」

浦島さんがウットリしていると、やがて立派なご殿へつきました。

「着きましたよ。このご殿が竜宮です。さあ、こちらへ」

カメに案内されるまま進んでいくと、この竜宮の主人の美しい乙姫さまが、色とりどりの魚たちと一緒に浦島さんを出迎えてくれました。

「ようこそ、浦島さん。わたしは、この竜宮の主人の乙姫です。このあいだはカメを助けてくださって、ありがとうございます。お礼に、竜宮をご案内します。どうぞ、ゆっくりしてってくださいね」

浦島さんは、竜宮の広間へ案内されました。浦島さんは用意された席に座ると、魚たちが次から次へと、見たことがないようなごちそうを運んできます。

ふんわりと気持ちのよい音楽が流れて、タイやヒラメやクラゲたちの、みごとな踊りが続きます。

ここはまるで、天国のようです。

そして、

「もう一日、もう一日」

と、乙姫さまにいわれるまま竜宮ですごすうちに、三年の月日がたってしまいました。

„Aaaa! Ovo je predivno!”

Kako je Urashima zadivljeno gledao, nije prošao ni čas, a već su stigli u velebno kraljevstvo.

„Stigli smo! Ovo je kraljevstvo Ryuugu. Za mnom!”

Dok je prolazio vođen kornjačom, prelijeпа princeza Otohime izašla mu je u susret u pratnji šarenih riba.

„Dobrodošli, gospodine Urashima! Ja sam Otohime, princeza Ryugyu kraljevstva. Najljepša ti hvala što si onaj put spasio kornjaču. U znak zahvalnosti, pokazat ću ti palaču Ryuugyu kraljevstva. Molim Vas, raskomotite se.”

I tako su Urashimu odveli u veliku dvoranu.

Posjevši ga na mjesto pripremljeno za njega, ribe su iznosile bogatu gozbu jednu za drugom.

Lepršava i ugodna glazba je svirala, a meduze, listovi i halibuti nastavili su svoj veličanstveni ples.

„Ovdje je kao u raj.”

„Još jedan dan, molim te, ostani još jedan dan.”, molila je princeza te je tako proveo tri godine u Ryuugyu kraljevstvu.

浦島さんは、はっと思い出しました。

（家族や友だちは、どうしているだろう？）

そこで浦島さんは、乙姫さまに言いました。

「乙姫さま、いままでありがとうございます。ですが、もうそろそろ、家へ帰らせていただきます」

「帰られるのですか？ よければ、このままここで暮しては」

「いいえ、わたしの帰りを待つ者もおりますので」

すると乙姫さまは、さびしそうに言いました。

「…そうですか。それはおなごりおいしいです。では、おみやげに玉手箱を差し上げましょう」

「玉手箱？」

「はい。この中には、浦島さんが竜宮で過ごされた『時』が入っております。これを開けずに持っている限り、浦島さんは年を取りません。ずーっと、今の若い姿のままでいられます。ですが開けてしまうと、『時』がもどってしまいますので、決して開けてはなりませんよ」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

乙姫さまと別れた浦島さんは、またカメに送られて地上へ帰りました。

地上にもどった浦島さんは、まわりを見回してびっくり。

「おや？ わずか三年で、ずいぶんと様子がかわったな」

U jednom trenutku Urashima se naglo sjetio:

„Što li se zbiva s mojom obitelji i prijateljima?“

Stoga, Urashima reče princezi:

„Otohime, hvala Vam na svemu do sada. No, vrijeme je da se vratim svojoj obitelji.“

„Vraćate se? Ako želite, možete ostati ovdje živjeti...“

„Ne, ima ljudi koji očekuju moj povratak stoga...“

U tom trenutku Otohime sjetno reče:

„Zar tako? Žao mi je zbog toga. Ako je tako, imam za Vas čarobnu kutiju za uspomenu.“

„Čarobnu kutiju?“

„Tako je. U njoj se nalazi sve vrijeme koje si proveo u Ryuugyu kraljevstvu, Urashima. Sve dok ju ne otvorite, nećete starjeti. Vaša pojava će ostati zauvijek mladolika. Ali, otvorite li ju samo jednom, sve vrijeme do sada će se vratiti, stoga ju nikada ne smijete otvoriti.“

„Razumijem. Mnogo Vam hvala.“

Urashima se pozdravio s Otohime te se u pratnji kornjače vratio na površinu.

Vrativši se na površinu, Urashima je začuđeno gledao oko sebe.



たしかにここは、浦島さんがつりをしていた場所なのですが、なんだか様子がちがいます。

浦島さんの家は、どこにも見あたりませんし、出会う人も知らない人ばかりです。

(わたしの家は、どうなったのだろう？みんなはどこかへ、引っ越したのだろうか？)

「あの、すみません。浦島の家を知りませんか？」

浦島さんが一人の老人にたずねてみると、老人は少し首をかしげて言いました。

「浦島？…ああ、たしか浦島という人なら、七百年ほど前に海へ出たきりで帰らないそうですよ」

「えっ！？」

老人の話を聞いて、浦島さんはびっくり。

竜宮の三年は、この世の七百年にあたるのでしょうか？

「家族も友だちも、みんな死んでしまったのか…」

がっくりと肩を落とした浦島さんは、ふと、持っていた玉手箱を見つめました。

(そういえば、乙姫さまは言っていたな。この玉手箱を開けると、『時』がもどってしまうと…。もしかしてこれを開けると、自分が暮らしていた時に戻るのでは。)

そう思った浦島さんは、開けてはいけないと言われていた玉手箱を開けてしまいました。

すると中から、まっ白なけむりが出てきました。

„Ajme! Pa zar se sve tako promijenilo u samo tri godine?”

Naravno, mjesto na kojem je Urashima pecao još je uvijek bilo ovdje, no nešto nije bilo kao prije.

Urashimine kuće više nije bilo na vidiku te je samo sretao nepoznate ljude.

„Gdje li je moj dom? Zar su se svi neka-  
mo preselili? Ah, oprostite! Znete li gdje  
je Urashimina kuća?”

Kada je Urashima pitao jednog starca, on nagnuvši glavu reče:

„Urashima? A, da! Onaj Urashima što je prije više od sedamsto godina otišao na more i nikada se više nije vratio.”

„Što?!”

Čuvši starčevu priču, Urashima je ostao zatečen.

„Tri godine u Ryuugyuu kraljevstvu iznosi sedamsto godina na površini. Moja obitelj i moji prijatelji... svi su umrli?”

Slomljenom Urashimi poteknu suze i odjednom se sjeti čarobne kutije.

„Pa da! Rekla mi je Otohime:

„Otvori ovu kutiju i vrijeme će se vratiti.”  
Ako otvorim kutiju, možda se i vrati vrijeme mog života, stoga...”

Tako misleći, Urashima je otvorio kutiju, unatoč tomu što mu je Otohime rekla da to ne smije učiniti.

「おおっ、これは」

けむりの中に、竜宮や美しい乙姫さまの姿がうつりました。

そして楽しかった竜宮での三年が、次から次へとうつし出されます。

「ああ、わたしは、竜宮へ戻ってきたんだ」

浦島さんは喜びました。

でも、玉手箱から出てきたけむりは次第に薄れていき、その場に残ったのは、髪の毛もひげもまっ白の、ヨボヨボのおじいさんになった浦島さんだけでした。

Zadimiše se.

Iz kutije je izašao snježnobijeli dim.

„Aaaa, što je ovo?”

U dimu se odraziše Ryuugyu kraljevstvo i Otohimin lik.

Također, sve tri radosne godine nizaše se jedna za drugom.

„A! Vratio sam se u Ryuugyu kraljevstvo!”

Urashima bijaše presretan.

No dim što bijaše izašao iz Urashimine čarobne kutije postupno je nestao. Sve što na tom mjestu ostaše bio je Urashima bijele kose i brade što postade starac.

Marina Irina Barešić

## 雪女 Snježna dama

(Yuki onna)

むかしむかしの、寒い寒い北国でのお話です。

あるところに、茂作とおの吉という木こりの親子が住んでいました。

この親子、山がすっぽり雪に包まれる頃になると、鉄砲を持って猟に出かけて行くのです。

ある日の事、親子はいつもの様に雪山へ入って行きましたが、いつの間にか空は黒雲に覆われて、吹雪となりました。

二人は何とか、木こり小屋を見つけました。

「今夜はここで泊まるより、仕方あるめえ」

「うんだなあ」

チロチロと燃えるいろりの火に当たりながら、二人は昼間の疲れからか、すぐに眠り込んでしまいました。

風の勢いで戸がガタンと開き、雪が舞い込んできます。

そして、いろりの火がフッと消えました。

Ovo je priča iz davnine s ledeno hladnog sjevera zemlje.

Tamo su živjeli drvosječe, otac i sin po imenu Shigesaku i Ono Kichi.

U danima kada bi planinu potpuno zamelo snijeg, otac i sin noseći puške, odlazili bi u lov.

Toga dana, kao i obično, otac i sin se uputiše prema snježnoj planini, ali odjednom nebo su prekrili crni oblaci te je počela mećava.

Dvojac je nekako uspio pronaći kolibicu namijenjenu drvosječama.

„Ne preostaje nam ništa drugo, nego da ovdje provedemo noć.”

„Pravo zboriš.”

Sjedeći pred svjetlucavim plamenom kamina, dvojac je ubrzo zaspao od popodnevnog umora.

Vrata su se otvorila silinom vjetra te je snijeg dolepršao.

Na kraju se ugasila i vatra u kaminu.

„Uh, kako je hladno!”

「う～、寒い」

あまりの寒さに目を覚ましたおの吉は、その時、人影を見たのです。

「誰じゃ、そこにおるのは？」

そこに姿を現したのは、若く美しい女の人でした。

「雪女！」

雪女は眠っている茂作のそばに立つと、口から白い息を吐きました。

茂作の顔に白い息がかかると、茂作の体はだんだんと白く変わっていきます。

そして眠ったまま、静かに息を引き取ってしまいました。

雪女は、今度はおの吉の方へと近づいて来ます。

「たっ、助けてくれー！」

必死で逃げようとするおの吉に、なぜか雪女は優しく言いました。

「そなたはまだ若々しく、命が輝いています。望み通り、助けてあげましょう。でも、今夜の事をもしも誰かに話したら、その時は、そなたの美しい命は終わってしまいますでしょう」

そう言うと雪女は、降りしきる雪の中に吸い込まれるように消えてしまいました。

おの吉は、そのまま気を失ってしまいました。

やがて朝になり目が覚めたおの

U tom trenutku, hladnoćom probuđeni Ono Kichi ugledao je čovječju figuru.

„Tko je tamo?“

Pojava, što tamo stajaše, bila je mlada lijepa žena.

„Snježna dama! „

Stajala je pored usnulog Shigesakua, a iz usta joj je izlazio bijeli dah.

Kada je Shigesakuu udahнула bijeli dah, njegovo tijelo postupno je mijenjalo boju u bijelu, sve dok nije mirno u snu ispustio svoj zadnji dah.

Ovaj put Snježna dama približila se Ono Kichiju.

„Upo... Upomoć!“

Ono Kichiju, koji je očajnički pokušao pobjeći, Snježna dama iz nekog razloga nježno je rekla:

„Ti si još uvijek mlad i tvoj je život u punom sjaju. Pustit ću te kako si me zamolio. No, progovoriš li bilo komu o večerašnjem događaju, tvoj lijepi život će završiti.“

Izrekavši to, nestala je u snježnoj mećavi kao usisana.

Ono Kichi u tom je trenutku izgubio svijest.

吉は、父の茂作が凍え死んでいるのを見つけたのです。

それから、一年がたちました。

ある大雨の日、おの吉の家の前に一人の女の人が立っていました。

「雨で困っておいでじゃろう」

気立てのいいおの吉は、女の人を家に入れてやりました。

女の方は、お雪という名でした。

おの吉とお雪は夫婦になり、可愛い子どもにも恵まれて、それはそれは幸せでした。

けれど、ちょっと心配なのは、暑い日差しを受けると、お雪はフラフラと倒れてしまうのです。

でも、やさしいおの吉は、そんなお雪をしっかり助けて、仲良く暮らしていました。

そんなある日、針仕事をしているお雪の横顔を見て、おの吉はふっと遠い日の事を思い出したのです。

「のう、お雪。わしは以前に、お前の様に美しいおなごを見た事がある。お前と、そっくりじゃった。山で、吹雪にあったの。その時じゃ、あれは確か、雪女」

すると突然、お雪が悲しそうに言いました。

「あなた、とうとう話してしまっ

Već se bila spustila večer kada je Ono Kichi povratio svijest te pronašao svog do smrti smrznutog oca.

Od toga je prošlo godinu dana.

Jednog kišnog dana pred kućom Ono Kichija ukazala se žena.

„Nemoj stajati na kiši” – reče dobrodušni Ono Kichi i uvede ženu u kuću.

Ženino ime bilo je Oyuki<sup>1</sup>.

Ubrzo su postali supružnici blagoslovljeni jednim djetetom. Bila je to prava sreća!

No, ono što je zabrinjavalo bilo je zatopljenje zbog kojeg je Oyuki bila nestabilna te je padala.

Unatoč tomu, nježni Ono Kichi bio je Oyuki podrška te su zajedno živjeli u slozi.

Jednoga dana, gledajući Oyukin profil dok je šila, Ono Kichiju odjednom se vrati sjećanje na događaj iz davnih dana.

„Oyuki, jednom davno sreo sam ljepoticu poput tebe. Ista ti. Sreo sam ju u planini za vrijeme mećave. Tada to je, bez sumnje, bila Snježna dama.”

Odjednom, ona tužno reče:

<sup>1</sup> Yuki (jap.) -snijeg

たのね。あれほど約束したのに」

「どうしたんだ、お雪！」

お雪の着物は、いつのまにか白く変わっています。

雪女であるお雪は、あの夜の事を話されてしまったので、もう人間でいる事が出来ないのです。

「あなたの事は、いつまでも忘れません。とても幸せでした。子どもを、お願いしますよ。

…では、さようなら。」

その時、戸がバタンと開いて、冷たい風が吹き込んできました。そして、お雪の姿は消えたのです。

„Na kraju si ipak progovorio. Iako si čvrsto obećao.”

„Što se dogođa, Oyuki?!”

Boja Oyukina kimona promijenila je boju u bijelu.

Budući da su događaji te večeri bili ispričani, Oyuki, koja je bila Snježna dama, više nije mogla biti ljudsko biće.

„Doista sam bila sretna. Nikad te neću zaboraviti. Molim te, daj mi dijete. Pa... zbogom!,,

U tom trenutku vrata se otvoriše uz glasan udarac, hladni vjetar uletiše te nestade njezina lika.

Marina Irina Barešić

## 十二支のはじまり Priča o dvanaest životinja zodiacja

### (Jūnishi no hajimari)

ある年の暮れ、神様は動物たちにおふれを出した。

「一月一日の朝、私の家の前に集まりなさい。早く私の家に来た者から順番に一年ずつ年をやる」

それをきいたうしは、しっぽをばたばたさせて喜んだ。

「おらも仲間にいれてもらうべ。だども、おらは、歩くのがのろいからな」

そこで、うしは1月1日の朝、まだ夜であたりが暗く、星も輝いているところから歩き始めた。

角のかげにねずみがかくれていることなど、全然知らないで。のっそら、のっそら、のっそら、のっそら。

神様の家についてみると、だれもいない。

「あらら、おらが一番だ」

やがて、明るくなって、門がじやんとあいた。

うしが一歩中へ入ろうとしたその時、角のかげからねずみがぴよんと飛び降りて、

「おらが、一番！」

Jednom davno, krajem godine, Božanstvo je životinjama reklo:

„Okupite se ujutro prvog siječnja ispred moje kuće. Prema redoslijedu dolaska nazvat ću godine po svakom od vas.”

Bik, čuvši to, zadovoljno mlatne repom i kaže:

„Iako sam spor, želim sudjelovati.”

Tako je ranom zorom prvog siječnja, dok su zvijezde još sjale u noći, Bik krenuo na put.

U sjenu njegovog roga se sakrio Miš, što Bik uopće nije primijetio.

Korak po korak, tap, tap tap, stigao je pred kuću Božanstva i vidjevši da još nikoga nema uzviknuo:

„Prvi sam!”

U trenu kada je Bik zakoračio, Miš iskoči iz sjene i uzvikne:

„Ja sam prvi!”

それで、うしは2番になってしまった。

とらは夜が明けたとたん飛び出した。

「おらより早く走れる者はいねえ。おらが一番だ」

と、走りに走って、かけつけると、目の前に大きい牛のおしりが見えるではないか。

「うおーっ、くやしいーっ」

それからというもの、とらは牛のおしりを見ると、かぶりつくようになったそう。

うさぎも足は早い。夜が明けると、すぐにかけだした。

ぴよん、ぴよん、ぴよん。

けれども、やっぱりとらにはかなわない。

うさぎは4番になった。

へびとたつは、同じ時に門の前に着いた。たつはりゅうとも言っていて、もともとはへびだったが、何百年もつらい修行をして、天に上るようになったのだ。

同じへびでも、たつの方がずつとえらい。

「たつさま、どうぞおさきに」

へびが頭を下げていったので、たつが5番、へびが6番になった。

Tako je Bik postao drugi.

S prvom zrakom Sunca pojavio se Tigar.

„Ja sam najbrži, bit ću prvi!”

Kako je svom snagom potrčao tako se iznebuha ispred njega stvorila velika Bikova stražnjica.

„Ovo se mora riješiti”, rekao je i zario zube u nju.

I Zec je brz. Čim je svanulo počeo je trčati.

Hop, hop, hop.

Međutim, nije bio brz poput Tigra te je završio četvrti.

Zmija i Zmaj su u isto vrijeme stigli pred vrata. Zmaj je nekoć bio zmija, no nakon nekoliko stotina godina teških vježbi, uspio je poletjeti do neba. Jer je nekoć i on bio zmija, s velikim poštovanjem Zmija mu je rekla:

„Gospodine Zmaje, izvolite ispred mene.”

Zmija mu se poklonila pa je Zmaj došao peti, a Zmija šesta.

Konj je brz, no proždrljiv. Ugledavši travu pomisli kako izgleda ukusno, zaustavi se i krene jesti malo ovamo, malo tamo.



うまだって、走れば早い。けれどもくいしんぼうなので、みちばたの草を見ると、

「あつ、うまそうだな」

と足をとめて、あっちで食べ、こっちで食べと、道草をくったものだから、7番になってしまった。

とりが出てきて、

「こけ一つ、こけ一つ、けんかはやめろ」

と、さるのおしりをけったり、いぬの背中をつついたりした。だから、いぬとさるはますます頭に血がのぼってくる。もう神様のところへ行くだころではない。

そのうちやっと、

「そうだ、そうだ、神様のところ行くんだった」

と気がついて、あわてて走っていった。

「お前らが一緒だと、またケンカになっておおごとだ」

と、とりが言って、さるといぬのあいだに入ったから、さる、とり、いぬの順番になった。

さて、いよいよ神様が現れて、動物たちにおっしゃった。

「集まったのは、これだけか。では、数えてみるとしよう。一番は、ねずみ、2番がうし、次からは、とら、うさぎ、たつ、へび、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ…全部で11匹。これでしめきりにしてよいかな」

と、その時、

Obzirom da je puno švrljao, zaostao je na sedmom mjestu.

Ovca je introvert i slabić.

„Iako sam ovakva kakva jesam, mogu li i ja sudjelovati? Ne, vjerojatno ne. Ali, svejedno, i ja bih. Ne, vjerojatno ne. Mogu li svejedno s vama?“

Sva pogubljena, došla je tek osma.

Pas i Majmun su se susreli na izlazu iz kuće.

Njihov odnos je bio loš i kad god bi se vidjeli posvađali bi se. Čim su započeli svađu izašao je Pijetao i povikao:

„Prestanite već jednom!“ te udario Majmuna po stražnjici, a Psa počeo bockati po leđima. Kako su i Pas i Majmun bivali sve ljući, u konačnici su zaboravili na put.

Uto su se sjetili da trebaju otići do kuće Božanstva i potrčali. „Ako budete blizu opet ćete se svađati, ovo je ozbiljno“, reče Pijetao, stane između Majmuna i Psa te takav redosljed i ostane, Majmun, Pijetao pa Pas.

Napokon se Božanstvo pojavilo i reklo životinjama: „Samo ste vi došli? Da vas prebrojim. Prvi je Miš, drugi je Bik, nadalje su Tigar, Zec, Zmaj, Zmija, Konj, Ovca, Majmun, Pijetao, Pas – sveukupno jedanaest. Je li to kraj?“ uto se začuje glas:

„Molim vas pričekajte, primite i mene.“

「まってくれえ、おらも入れてくれえ」

と、声がした。見ると、向こうからいのししが突進してきた。

いのししも、やっと仲間に入れてもらって、これでめでたく12支が決まった。

本当は、ねこも仲間に入りたかったけど、神様のところに集まる日をわすれてしまった。

そこで、ねずみに聞いたところが、ねずみは、

「1月2日だぞ」と、うそをついた。

ねこは、ねずみに聞いたとおり、1月2日の朝早く神様の家の前で待っていた。

神様が出てきて、「なんだ、おまえ何しに来た？」  
「おらも、ねこ年を作ってもらおうと思ってきた」

「何、寝ぼけておるのじゃ。それは、もう昨日決まってしまった。顔でも洗って出直してこい」

と神様にそう言われたもので、ねこは今でも、ひまさえあれば顔を洗い、ねずみを見つけると、「よくも、うそをついたな！」と追いかけて回しているんだそう

Izdaleka ugledaše Vepra kako trči sav izvan sebe.

Božanstvo ga je primilo i svečano zaključilo s dvanaest životinja.

Zapravo je i Mačka htjela biti uključena, ali je zaboravila dan okupljanja pa je pitala Miša koji joj je slagao da je okupljanje drugog siječnja. Onako kako je čula od Miša, rano ujutro drugog siječnja došla je pred kuću Božanstva koje ju je pitalo:

„Zašto si došla?”

Mačka mu odgovori: „I ja želim svoju godinu.”

Čuvši to, Božanstvo joj reče:

„Što je, još napola spavaš? To je još jučer odlučeno. Vрати se kad se umiješ.”

Tako Mačka i dan-danas pere lice i lovi Miša govoreći:

„Lijepo si me prevario!”

Akira Đurić, Nikola Jončić,  
Mateja Hip, Dora Gulić

## 月のうさぎ Zec na mjesecu

(Tsuki no usagi)

今は昔、天竺にうさぎ・きつね・さる、三匹のけものがいました。彼らはまことの心をおこして菩薩の修行をしていました。

「わたしたちは前世に深く重い罪を負い、賤しいけものとして生をうけた。これは前世に生きとし生ける者をあわれまず、財を惜しんで人に与えようとしなかったことの報いだ。だからこの生では、身を捨てて善いことをしよう」

3匹は最年長の者を親のように敬い、年長の者には兄のように接し、若い者を弟のように思って、自分よりほかの者を優先させました。

帝釈天はこれを見て、心を動かされました。

「彼らはけものだが、たいへんありがたい心を持っている。人の身ながら、生ある者を殺し、財産をうばい、父母を殺し、兄弟を敵の

Jednom davno u Indiji bile su tri životinje; zec, lisica i majmun. Duhovnim treningom poticali su pobuđivanje Istine.

„U prijašnjem smo životima puno griješili pa smo se rodili kao niže životinjska bića. Ovo nam je kazna jer nismo suosjećali sa svim živim bićima u prošlim životima i nismo dijelili s drugima. Zato smo u ovom životu odlučili odbaciti tjelesno i činiti dobra djela.”

Tri životinje su među sobom najstarijeg poštivali poput roditelja, sa srednjim su bili bliski kao sa starijim bratom, a najmlađeg su smatrali mlađim bratom jer su umjesto sebe prioritet stavljali na druge.

Bog Indra je ovime bio dirnut.

„Iako su životinje, posjeduju veliko srce.

ように思い、笑顔で悪心を抱いたり、恋い慕っているように見えながら怒りを宿している者も多い。しかし、このようなけものが誠の心を抱いているとは思えない。試してみよう」

帝釈天はたちまち老い疲れすべての能力を失ったような老人に姿を変え、3匹のけもののもとに現れました。

「私は年老い疲れどうしようもありません。私を養ってください。私は子がなく、家がなく、食物もありません。あなたたちは深いあわれみの心を持っていると聞きました」

3匹の獣はこれを聞いて、  
「わたしたちの望むところだ。すぐに養うことにしよう」と言いました。

さるは木に登り、クリ・カキ・ナシ・ナツメ・ミカン・コクハ・イチイ・ムベ・アケビなどを取り、また里に出ては、ウリ・ナス・ダイズ・アズキ・ササゲ・アワ・ヒエ・キビなどを取ってきて、好みに応じて食べさせました。

きつねは墓小屋におもむき、供え物の餅やご飯、アワビやカツオや様々な魚を取ってきて思うままに食べさせました。老人はすっかり満腹しました。

数日後、老人は言いました。  
「さるときつねはたいへん深い心

Mnogi ljudi ubijaju živa bića, krađu tuđe stvari, ubijaju roditelje, braću i sestre smatraju neprijateljima, s osmijehom prihvataju zle misli, žudeći za ljubavi zadržavaju gnjev. Ali, nisam mislio da životinje mogu shvatiti Istinu. Testirajmo ih.”

Bog Indra se u čas pojavi pred životinjama u obliku izmorenog starca.

„Ja sam običan umorni starac. Molim vas da se pobrinete za mene. Nemam ni djece ni kuće ni hrane. Čuo sam da imate vrlo suosjećajno srce.”

Čuvši to, tri životinje odgovore:

„Tomu smo se i nadali. Odmah ćemo se pobrinuti za vas.”

Majmun se popne na drvo i uzme kesten, japansku jabuku, krušku, žižulu, mandarinu, jap.tisu, akebiju itd., također iz sela uzme i donese dinju, patlidžan, soju, azuki grah, crni grah, proso itd. te nahrani starca onime što mu se svidjelo.

Lisica pođe prema groblju i uzme mochi, rižu, puzlatku, tunjevinu te razne ribe i da starcu da pojede koliko želi. Starac je do čepa napunio želudac.

Nakon nekoliko dana starac reče, „Majmun i lisica imaju veliko srce. Već mogu reći da su bodhisattve.”

を持っている。すでに菩薩である  
と言ってもいいだろう」

うさぎは発奮し、灯をともし  
香をたいて、耳を高く腰を低くし  
て、目を見開き前足は短く、尻の  
穴を大きく開いて、東西南北探し  
歩きましたが、ついに何も得るこ  
とができませんでした。

さるときつね、そして老人はあ  
ざ笑ったりはづかしめたり励まし  
たりしましたが、うさぎはやはり  
何も得られません。

「私は老人を養うために野山に行  
ったけれども、野山は恐ろしい。  
人に殺され、獣に食われる危険も  
ある。無駄に命を落としてしまう  
可能性が高い。ならば、今この身  
を捨てて老人の食物となり、この  
生を離れることにしよう」

うさぎは老人に言いました。  
「今、おいしいものを持ってきました。  
木を拾って火をおこして待つ  
ていてください」

さは木を拾ってきました。き  
つねはこれに火をつけて、うさぎ  
が何か持ってくるかもしれないと  
待ちましたが、うさぎは手ぶらで  
帰ってきました。

さるときつねは言いました。

「俺たちはおまえが何か持って  
くるというので、準備して待つて  
いた。しかし、何もないではない  
か。ウソをついて木を拾わせ、火  
をたかせて、自分が暖まろうとし  
ているのだ。憎らしい」

Zec, inspiriran ovime, zapalio je vatru i  
mirisne štapiće, izdužio uši, spustio leđa,  
širok otvorio oči, skratio prednje noge,  
raširio stražnju rupicu, i hodao u smjeru  
istok, zapad, jug, sjever, ali ništa se nije do-  
godilo.

Majmun, lisica i starac podrugljivo su se  
smijali, ponižavali ga i poticali, ali zec opet  
nije ništa postigao.

„Kako bi se pobrinuo za starca išao sam  
kroz polja i planine, ali polja i planine su  
zastrašujući. Mogu me ljudi ubiti, a posto-  
ji i opasnost da me životinje pojedu. Ve-  
lika je mogućnost da uzaludno izgubim  
život. Stoga, odmah ću odbaciti ovo tijelo,  
postati hrana za starca i oprostiti se od  
ovog života.” reče zec starcu.

„Odmah ću donijeti ukusnu hranu. Mo-  
lim vas skupite drva, zapalite vatru i pri-  
čekajte.”

Majmun je skupio drva. Lisica ovdje zapali  
vatru i pričekala u slučaju da zec još nešto  
donese, ali zec se vratio praznih ruku.

Majmun i lisica rekoše:

„Obzirom da si rekao da ideš po nešto, mi  
smo se pripremili i čekali. No, nije li da  
nema ničega? Slagao si nam pa smo skupi-  
li drva i zapalili vatru, ali sve je bila da se ti  
zgriješ. Srami se!

うさぎは言いました。

「私は力が及ばず、食物を持って  
くることができません。我が身を  
焼いて食べていただきます」

そう言って、火の中に入って焼  
け死にました。

このとき帝釈天はもとの姿に戻  
り、すべての人に見せるため、火  
に入ったうさぎの形を月の中に移  
しました。月の中に雲のようなも  
のがあるのはこのうさぎが火に焼  
けた煙であり、「月の中にうさぎ  
がいる」といわれるのはこのうさ  
ぎの形です。すべての人は、月を  
見るごとにこのうさぎのことを思  
い出します。

„Nisam mogao donijeti hranu. Spalit ću  
tijelo kako bi mogli pojesti.” zec reče te  
skoči u vatru i umre.

Uto se Bog Indra vrati u svoj izvorni  
izgled i, kako bi ga pokazao svim ljudima,  
na Mjesec prebaci oblik zeca koji je skočio  
u vatru. Kada se na Mjesecu vide oblaci to  
je zapravo dim zečevog spaljenog tijela te  
kada se kaže „Zec na Mjesecu” misli se na  
ovog zeca. Svi ljudi ga se sjetе kada pogle-  
daju Mjesec.

Mateja Hip

## 鉢かづき姫 Princeza sa zdjelom na glavi

(Hachikazukihime)

むかしむかし、今の大阪で河内（かわち）の国と呼ばれていた所に、ひとりの大金持ちが住んでいました。なに不自由ない暮らしをしていましたが、子どもだけはどうしてもさずかりません。それで毎晩、長谷寺の観音さまに手を合わせてお願いをして、ついに念願の子どもが生まれたのです。その子どもはお母さんによく似た、美しい姫です。

ところが姫が十三才になった年、お母さんは重い病気にかかりました。お母さんは、姫を枕元に呼ぶと、

「わたしはまもなく遠い所へ行きます。わたしがいなくなるのは運命ですから、悲しむ必要はありません。さあ母の形見に、これを頭にのせていなさい。きっと、役に立ちますからね」

そう言って重い箱を姫の頭の上にのせたばかりか、大きな木の鉢までかぶせました。そして、お母さんはなくなりました。

お父さんは姫の頭の上の鉢を取ろうとしますが、どうしてもはず

Nekoć davno, u pokrajini Kawachi, živio je veoma bogat čovjek.

Živio je bez poteškoća, samo što nikako nije mogao dobiti dijete.

Zato je svake večeri sklopio ruke i molio se božici milosti Kanoni u hramu Hasederi te se napokon rodilo željno iščekivano dijete.

Djevojčica je bila predivna princeza, poput svoje majke.

No, kada je navršila 13 godina, majka joj se ozbiljno razboljela. Pozvala ju je do postelje i rekla:

„Uskoro odlazim na daleko mjesto. To je moja sudbina i nema potrebe da budeš tužna. Nosi ovo na glavi u spomen na mene, dobro će ti doći.”

S tim riječima na djevojčinu glavu je stavila tešku kutiju, te povrh nje veliku drvenu zdjelu.

Nakon toga, majka je preminula.

Otac je pokušao maknuti zdjelu s djevojčine glave, ali bezuspješno. Iz tog razloga, djevojku su prozvali ‘Hachikazuki’ (dosl.

せません。そのために姫は『鉢かづき』と言われてバカにされたり、いじめられたりしました。

やがてお父さんに、二度目の奥さんがやってきました。

この新しいお母さんが悪い人で、鉢かづき姫にいじわるをしたたり、かげ口をたたいたり、最後にはお父さんをうまくだまして、鉢かづき姫を追い出してしまったのです。家を追い出された鉢かづき姫は、シクシク泣きながら大きな川のほとりにやってきました。

「どこへ行ってもいじめられるのなら、ひと思いに、お母さまのそばへ行こう」

ドボン！

思いきって川の流れて飛び込みましたが、木の鉢のおかげで浮きあがってしまいました。鉢かづき姫は、死ぬ事さえ出来ないのです。

村の子どもたちが、鉢かづき姫に石を投げました。

「わーい。頭がおわん。からだが人間。お化けだあー」

ちょうどその時、この国の殿さまで山陰の中将という人が、家来を連れてそこを通りかかりました。

中将は親切な人だったので、鉢かづき姫を家に連れて帰ってふろたき女にすることにしました。この中将には、四人の男の子がいます。

上の三人は結婚していましたが、一番下の若君には、まだお嫁

‘djevojka sa zdjelom na glavi’) te su je ismijavali i ugnjetavali.

S vremenom, otac je našao drugu ženu. Maćeha je bila zla žena i podla prema princezi Hachikazuki, koju je ogovarala te naposljetku i uspješno uvjerila njenog oca da ju izbací iz kuće.

Princeza Hachikazuki je otišla do obale velike rijeke, gorko plačúći.

„Ako će me ugnjetavati gdje god bila, zašto se ne bih pridružila svojoj majci?”

Pljus!

Bacila se svom snagom tijela u brzac, ali je plutala zahvaljujući drvenoj zdjeli.

Princeza Hachikazuki nije mogla ni umrijeti.

Djeca iz sela su ju gađala kamenjem.

„Uaaa. Glava je zdjela. Tijelo je ljudsko. Duh!”

U tom trenu, muškarac zvan Chūjō, zapovjednik Sanina, prošao je sa svojim slugama.

Chūjō je bio dobar čovjek te je Hachikazukihime odveo kući sa sobom i učinio ju je furotaki-radnicom (žena koja zagrijava vodu za kadu).

Imao četiri sina.

Tri starija sina bila su oženjena, ali najmlađi princ još nije imao ženu. Mladi princ, koji je imao nježno srce, gledao je



さんがいませんでした。心のやさしい若君は、鉢かづき姫が傷だらけの手で水を運んだり、おふろをたいたりするのを見てなぐさめました。

「しんぼうしなさい。きっと、良い事があるからね」

「はい」

鉢かづき姫は、どんなにうれしかった事でしょう。こんなにやさしい言葉をかけられたのは、お母さんが死んでから初めてです。

それから、何日か過ぎました。

若君は、お父さんの前へ出ると、

「父上。わたしは、あの娘と結婚しようと思います。しんぼう強く、心のやさしいところが気に入りました」

と、言ったのです。

もちろん、お父さんの中将は反対です。

「ならん！ あんな、ふろたき女など！」

「いいえ！ あの娘は素晴らしい女性です。あれほどの娘は、他にはいません！」

「素晴らしい？ 他にはいないだと？ …よーし、では嫁合わせをしようではないか。兄たちの嫁と、あの鉢かづきを比べようではないか」

三人の兄の嫁は、とても美しい娘です。こうすれば鉢かづき姫は恥ずかしくて、自分からどこかへ行ってしまおうと考えたのです。

Hachikazukihime kako nosi vodu svojim izranjenim rukama i kako zagrijava kadu te ju je tješio:

„Budi strpljiva. Sigurno će biti dobro.”

„Da.”

Hachikazukihime je bila tako sretna. Prvi put joj je od majčine smrti netko uputio takve nježne riječi.

Poslije toga, prošlo je nekoliko dana.

Mladi princ izašao je pred oca. Rekao je:

„Oče. Odlučio sam se oženiti za onu djevojku. Oduševljen sam njenom postojanom strpljivošću i nježnim srcem.”

Naravno, otac se usprotivio:

„Nikako! Zar furotaki-radnicu?!”

„Ne! Ona je predivna žena. Druge djevojke poput nje nema!”

„Predivna? Druge poput nje nema, kažeš?”

...Dobro, hoćemo li onda usporediti nevjeste? Nećemo li usporediti tu Hachikazukihime sa ženama tvoje starije braće?”

Žene trojice starije braće bile su veoma lijepe princeze. Otac je mladog princa mislio da će, ako se to napravi, Hachikazukihime biti posramljena te da će svojevoljno negdje otići.

さて、いよいよ嫁合わせの夜がきました。

鉢かづき姫は思わず手を合わせて、長谷寺の方をおがみました。

「お母さま。観音さま。今夜、嫁合わせがあります。お兄さま方のお嫁さんは、とても美しい姫君たちと聞きます。わたしの様な鉢かづきが出て行って、いとおいしい若君に恥をかかせるくらいなら、いっそこのままどこかへ…」

その時です。今までどうしてもはずれなかった頭の木鉢が、ポロリとはずれたのです。鉢の下からは、かがやくばかりの姫が現れました。

そして鉢の中からは、金・銀・宝石があとからあとからこぼれ出しました。そこへ現れた若君が言いました。

「やはり、あなたは素晴らしい娘だ。さあ、美しい姫よ、嫁合わせに行きましょう」

屋敷の中では、三人の兄たちの美しく着飾った姫たちがならんでいます。そこへ鉢かづき姫が、ニコニコと笑いながら現れました。

「おお一つ」

お父さんの中將が思わず声をあげたほどの、まぶしいばかりの美しさです。中將は鉢かづき姫の手をとって自分の横に座らせると、若君に言いました。

「まったく、お前の言う通り素晴らしい娘だ。この娘を妻とし、幸せに暮らすがい」

「はい、父上！」

Naposljedku, večer usporedbe nevjesti je došla. Hachikazukihime je nesvjesno sklopila ruke i molila se u smjeru Hase-dere:

„Majko. Kannon-sama. Večeras se uspoređuju nevjeste. Čujem da su žene starije braće izrazito lijepe djevojke. Mislim da bih radije otišla, nego da ljupki princ bude ovako osramoćen zbog mene.”

U taj trenutak zdjela, koju dotad nikako nije mogla maknuti s glave, pala je.

Ispod zdjele pojavila se prelijepa princeza. Zatim je iz zdjele jedno za drugim ispalo zlato, srebro i drago kamenje.

Tada se pojavio mladi princ i rekao:

„Kao što sam mislio, ti si predivna djevojka. Dobro, lijepa princezo, idemo na usporedbu nevjesti.”

U palači su lijepo sređene žene trojice starije braće stajale u redu. Pojavila se Hachikazukihime ozarenog osmjeha od uha do uha.

„Oh!” - otac nije mogao zatomiti uzdah, zato što je bila nevjerojatno i zasljepljujuće lijepa.

Chūjō je uzeo ruku Hachikazukihime, sjeo pored nje te je mladom princu rekao:

„Uistinu, kao što si rekao, predivna je djevojka. Uzmi ovu djevojku za ženu i živite sretno zajedno.”

„Da, oče!”, uzvikne princ.

„Hvala Vam najljepša, oče!”, uzvikne princeza.

「ありがとうございます。お父さま」

それから若君と姫は仲むつまじく暮らして、二人の間には何人かの子どもも生まれました。

ある時、鉢かづき姫が長谷寺の観音さまにお参りをした時のことです。本堂の片すみで、みすぼらしい姿のお坊さんに会いました。そのお坊さんの顔を見て、鉢かづき姫はびっくり。

「まあ、お父さまではありませんか」

「姫、姫か！」

二人は抱き合って、数年ぶりの再会を喜びました。すっかり落ちぶれて新しい奥さんにも見捨てられたお父さんは、鉢かづき姫を追い出した事を後悔して、旅をしながら鉢かづき姫を探していたのです。

「すまなかった。本当にすまなかった」

泣いてあやまるお父さんに、鉢かづき姫はにっこりほほえみました。

「いいえ。いろいろありましたが、今はとても幸せなのですよ」

それからお父さんは鉢かづき姫のところにひきとられ、幸せに暮らしました。

Mladi princ i princeza živjeli su skladno i dobili puno djece.

Jedan dan, Hachikazukihime je otišla pomoliti se Kannon-sami u Hasederu. U kutu glavne dvorane hrama sreća je neugledan lik redovnika.

Pogledavši lice redovnika, Hachikazukihime se iznenadila.

„Aahh, jesi li to ti, oče?“

„Kćeri, kćeri, jesi li to ti?!“

Zagrlili su jedno drugo te se obradovali što su se ponovno vidjeli nakon dugo godina. Spavši na niske grane, oca je ostavila njegova druga žena te je krenuo na put, izrazivši žaljenje što je protjerao Hachikazukihime, kako bi ju našao.

„Oprosti mi. Zaista, oprosti mi.“

Otac se plačući ispričavao, a Hachikazukihime se blistavo smiješila.

„Sve je u redu. Svašta se dogodilo, ali sada sam potpuno sretna.“

Poslije toga, Hachikazukihime uzela je oca pod svoju skrb i živjeli su sretno.

Leona Posavec, Alan Tomašković



## 酒呑童子 Shūten Dōji

### (Shūten Dōji)

延喜の帝の治世時代のこと。丹波国の大江山に住む鬼神が、日暮れになると現れては若い娘をさらっていくという悪事を働きはじめました。

とりわけあわれだったのは、上皇に仕える池田の中納言くにたかという人でした。

身分も良く財産もある家のたった一人の美しい姫君をさらわれてしまったのです。

占ってもらおうと大江山に居る事がわかったので、帝に報告すると

「鬼神もおののくと聞こえの高い源頼光に征伐してもらおう」

と、頼光を呼び出します。

事情を聞いた頼光は碓井貞光、卜部季武、渡辺綱、坂田公時、藤原保昌を集めて征伐の準備をします。

出発前、頼光と保昌は岩清水八幡、綱と公時は住吉神社、貞光と季武は熊野権現にお祈りします。

Bilo je to za vrijeme vladavine cara Engija. Demoni koji su živjeli na planini Ōe u regiji Tamba, počeli se pojavljivati nakon sumraka i otimati mlade djevojke.

Najnesretniji bio je Kunitaka, vijećnik Ikede, koji je bio u službi umirovljenog cara.

Bio je iz bogate obitelji visokog statusa, imao je samo jednu lijepu kćer i nju su mu oteli.

Zahvaljujući prorocatelju, saznao je da se nalaze na planini Ōe pa je izvijestio cara, koji je pozvao Yorimitsua rekavši: „Neka Minamoto no Yorimitsu, za kojeg se kaže da ga se boje čak i demoni, osvoji ovu planinu.”

Kada je Yorimitsu čuo za situaciju, okupio je Usui Sadamitsua, Urabe no Suetakea, Watanabe no Tsunu, Sakata no Kintokija i Fujiwara no Yasumasu kako bi se pripremio za osvajanje.

Prije polaska, Yorimitsu i Yasumasa pomolili su se kod Iwashimizu Hachimana, Tsuna i Kintoki u hramu Sumiyoshi, a Sadamitsu i Suetake u Kumano Gongenu.

そして六人は山伏の格好をして鎧と刀を隠し、山に入っていました。

すると岩穴に、三人の老人が住んでいるのを見つけます。

「こんな所に、老人ばかりで暮らしているとは何者だ。名を名乗れ」

と聞くと

「怪しい者ではございません。この山に住む酒吞童子という鬼神に妻子をとられ、その恨みを晴らそうと三人で相談していたのです」

目的が同じとわかったので、老人たちと打ち解けて六人もそこで休憩し、酒を飲みながら話します。

老人曰く

「あの鬼はいつも酒を呑んでいるので、酒吞童子と呼ばれているのです。私どもが持っているこの神便鬼毒酒という不思議な酒は、神には便利でも鬼が飲むと毒になるという酒です。」と酒を六人に渡し、更に星甲という霊力を持った甲までくれました。

「さては三社の神々のご出現か」と気がついた六人。

神のご加護に感謝しながら、なんとか酒吞童子の棲家へたどり着きます。

見張りの鬼どもが六人を山伏だと思って中に通すと、酒吞童子が現れます。

Zatim su sva šestorica, obučeni kao planinski redovnici, sakrili svoje oklope i mačeve te krenuli po planini.

Putem su naišli na tri starca koji su živjeli u pećini.

„Kakvi to starci žive na ovakvom mjestu? Predstavite se.”

„Nismo mi nikakvi sumnjivi ljudi. Nas smo trojica razgovarali o tome kako se osvetiti demonu ove planine, Shuten Dōjiju koji nam je oduzeo žene i djecu.”

Odgovorili su.

Otkrivši da imaju zajednički cilj, šestorka se tamo odmorila i popričala uz sake.

„Taj demon uvijek pije, zato ga nazivaju Pijani (Shuten) Dōji.” Rekao je Starac. „A mi imamo ovaj mistični sake zvan Božanski sake, koristan ljudima, no otrovan za demone.”

Rekao je i predao šestorici sake te im je čak dao hoshi-kabuto, kacigu s božanskim moćima.

Šestorka je tada shvatila da su im se to pojavili bogovi triju svetišta.

Zahvaljujući bogovima na darovima, uspjeli su doći do Shuten Dōjijevog obitavališta.

Demoni koji su bili na straži mislili su da su njih šestorica planinski redovnici te su ih pustili unutra.

„Dovraga, tko uopće dolazi na ovakvo mjesto?” „Mi smo ovdje zbog asketskog treninga. Donosimo sa sobom i sake pa bismo voljeli ovdje imati pijanku cijelu noć”

「こんなところまで来るとは、一体何者だ」

と怪しむ酒呑童子に頼光は

「私どもの修行ではあたりまえの事です。酒も持参しておりますので、ここで夜通し酒盛りをしたく存じます」

と言うと、酒呑童子も興味を示します。

すると酒呑童子は手下に何か指示を出し、六人の前に人の血が入った杯を出しました。

六人はこれを難なく飲み干し、次に出された人の肉も食べると、酒呑童子は六人を信頼します。

そして例の酒を出し、酒呑童子と手下の鬼にも飲ませます。

いよいよ鬼たちが眠りについた頃、酒呑童子に近寄るとまた三社の神が現れ

「鬼の手足は鎖で繋いでおいた。頼光は首を斬り、他の五人が前後左右から斬りつけるのだ」

と言いました。

なんとか鬼を退治して、さらわれていた娘達を連れて都に帰りました。

池田の中納言夫妻も娘との再開をたいそう喜び、帝も喜びました。

この帝の御代は末永く平和となり、頼光たちの勇敢な働きも武士のほまれとしてたたえられました。

rekao je Yorimitsu sumnjičavom Shuten Dōjiju i zainteresirao ga.

Tada je Shuten Dōji dao nekakve upute svojim podanicima te stavio šalicu ljudske krvi ispred njih šestorice.

Šestorica su popila krv bez poteškoća, a ako uspiju i pojesti ljudsko meso koje im je posluženo, Shuten Dōji će im vjerovati.

Zatim su Shuten Dōjiju i njegovim podanicima poslužili poseban sake.

Kada su demoni napokon zaspali, približili su se Shuten Dōjiju te su se pred njima pojavila trojica bogova koji su im rekli:

„Okujte udove demona lancima. Yorimitsu neka mu odrubi glavu, a ostala petorica neka ga osakate do kraja.”

Nekako su se uspjeli riješiti demona te su se vratili u grad s otetim djevojkama.

Vijećnik Ikede i njegova žena bili su vrlo sretni što im se kćer vratila. Car je također bio zadovoljan.

Vladavinu ovog cara obilježio je dugogodišnji mir te se hvalila samurajska čast i hrabro djelo Yorimitsuove družine.

むかしむかし、今の京都府の大江山というところに、酒呑童子と言う、鬼の盗賊がいました。

酒呑童子はお酒に酔うと、いつも上機嫌になって、ポンポンと頭を叩いてニヤニヤと笑うのが癖でした。

ところが、源頼光たちに退治されてからは、酒呑童子は首だけになってしまいました。

お酒好きの酒呑童子は、首だけになっても酒を飲むのを止められません。

昼も夜も、まっ黒な雲に乗って空を飛んで歩き、酒屋を見つけると下りて来て、

グワグワグワァ〜

と、気味の悪い声で脅かして、酒をただ飲みするのです。

こんなふうにして酒屋を荒らし回ったものですから、京都や大阪では黒雲を見ただけで、どこの酒屋も大戸を下ろしてしまいます。

仕方なく酒呑童子は黒雲に乗って、江戸へやって来ました。

「ありや。あそこに酒屋があるぞ」

酒屋の前で、ヒラリと雲から飛び降りると、

「グワグワグワァ〜。上等の酒を五升(→9リットルほど)ばかり、かんをつけて持ってこーい！」

## 2. verzija priče

Jednom davno, na planini Ōe, živio je jedan demonski bandit zvan Shuten Dōji.

Kad god bi se Shuten Dōji napio, bio bi dobre volje te bi udarao glavom i smješkao se.

Međutim, nakon što su ga Minamoto no Yoritomo i njegova družba ubili, ostala mu je samo glava.

Shuten Dōji je toliko volio piti, da čak i kao samo glava nije mogao prestati.

Danima i noćima bi letio nebom na crnom oblaku, a kad bi pronašao točionicu, spustio bi se i vikao „gva gva gva!”

Jezivim bi glasom sve prestrašio pa besplatno pio alkohol.

Budući da ih je tako vandalizirao, u Kyoto i Osaki sve su točionice zatvarale svoja vrata pri pogledu na crni oblak.

Tako Shuten Dōji nije imao izbora nego vratiti se na crnom oblaku natrag u Edo.

„Evo ga. Ondje je jedna točionica.”

Kada je došao ispred točionice, skočio je s oblaka i rekao

„Gva-gva-gva-gva-gva! Donesite mi devet litara dobrog sakea!”

Ljudi u točionici su problijedjeli.



酒屋の者たちは、まっ青になりました。

持って行かなければ、何をされるか分かりません。

急いでかんをつけると、杯代わりにどんぶりをそえて、ブルブル震えながら差し出しました。

「ど、どうぞ。手じゃく(→自分でつぎながら酒を飲む事)でお飲みなすって」

置いて逃げ様とすると、首が怒鳴りました。

「おい、おい。おれは、この通り首だけだ。手じゃくではやれん。飲ませてくれ」

と、大きな口をバッキリと開けました。

酒屋の主人は仕方なく、どんぶりについてでは飲ませ、ついでは飲ませて、五升の酒をみんな飲ませてやりました。

童子の首はすっかり酔っぱらって、上機嫌です。

「ああ、久しぶりで、何ともいえない良い気持ちだ。ついでに、わしの頭をポンポンと叩いてくれ」

と、言います。

酒屋の主人が怖々ポンポンと叩いてやると、首はいかにもうれしそうにニヤッと笑ったそうです。

Ako mu ne donesu alkohol, tko zna što će se dogoditi.

Ubrzano su natočili alkohol u čašu i ponudili mu zdjelicu riže umjesto čaše, drhteći.

„I-izvolite. Poslužite se i popijte.”

Kada su pokušali otići, Shuten Dōjijeva glava je poviknula.

„Hej, hej. Ja sam samo glava. Ne mogu se sam poslužiti. Dajte mi piće.” Otvorio je svoja velika usta.

Vlasnik točionice nije imao izbora nego mu uz zdjelu riže dati i da popije čašu, a zatim i preostalih devet litara sakea.

Dōjijeva glava bila je potpuno pijana i dobro raspoložena.

„Ah, već se neko vrijeme nisam ovako dobro osjećao. Kad smo već ovdje, potapšajte me po glavi”, rekao je.

Kada ga je vlasnik točionice prestrašeno potapšao, glava mu se široko osmjehnula.